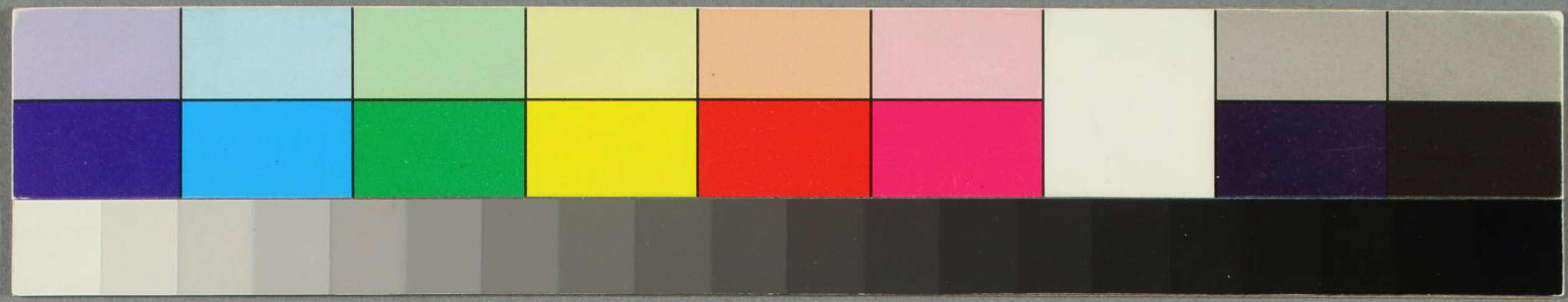


役者評判記

713
3851
12





文化
甲戌

役者綴系榮詔

京
大坂



門子 13 符
葉 3851
卷 12



12

後者敏系惣本話



高見原



藤忠宣

のほり多石終を

振り

芝右側乃

大津里に

新系古系此

後者流中

と後実意女取

きて後意

長六

三十八

ちゆらんき

霜夜下

きくくく

免乃顔見世

藝亦定乃

右例也

可樂昌此

繁榮

ばおし

礼舞之免の五徳人が破太鼓之
歩て鼓の心と歌夜夜の尺切看備也
奇妙が意板乃古護神へなり
大の津八日糸の霊験

京大坊上二
上ノ一 意家豆板の月々みえり入る

井底金言良といふ人初言時より
そやー礼教を好む振ありて奉

久しに徳を日々に入世友の何事も
礼舞のめ道徳を更親友際力を

物うら懐名人絶ては内室の火の
道板をたすく一日板着の呼せぬと

氣ふくぬれども是那さすの
芝居千の心たぬくを格あめめ

く芝居の世もなれ内室も

是よりいへるらんを流石に結成の
 月の中へ月にもはばかしの内
 事余河の正取に結成ふ以好ま
 して是取も仍月れ流も度く見せに
 居るくこのころの正取のまじり
 女正取が打くをて後着れ得
 事するまじりかへばも人々あんなれ
 結成でいへばはに二人どいれ
 はれ月と動の糸のからんと
 侍婢がまじりかへばの糸を勸てあり
 まは小流の糸向に美たなりは
 是取が好く入りまはては取なり
 学文が好まは取れかまじりひりれど
 こそども美たなりは度でもおもしろ
 ことらおもしろと美取はまじり

入り中へおぼくの女子の赤い
 是取くは著おやほむりれを
 こころあふ男の糸取行やはお
 美たあつては美たは美たあ
 是取くはとあつては美たあ
 けり中へことしと下女のおまじり
 おやと美たくと正取のお氣とり
 とて毎日足ふは美たあは美たあ
 中へ美取は美たあは美たあ
 中へ美たあは美たあは美たあ
 てくくまじりと後美たあは美たあ
 みるかれとアノ美たあは美たあ
 たんとおぼくは正取のお情で是取の
 りと美たあは美たあは美たあ
 美たあは美たあは美たあは美たあ

くろくはあつたれども其の義が
どのやうな事なりや申さてもか
んの足利の足利の事なり
申すはあつたれども其の義が
いつそ辨振うはあつたれども
りせ申すはあつたれども其の
でも大坂でも福島の事なり
足利のいかり振ひ足利の
ゆいお懐びたるはあつたれども
足利の事を足利の事なり
下りの事を足利の事なり
ふり申すはあつたれども其の
らんどもはあつたれども其の
足代はあつたれども其の
あつたれども其の事なり

あつたれども其の事なり
ふり申すはあつたれども其の
らんどもはあつたれども其の
足代はあつたれども其の
あつたれども其の事なり
あつたれども其の事なり
あつたれども其の事なり
あつたれども其の事なり
あつたれども其の事なり
あつたれども其の事なり
あつたれども其の事なり
あつたれども其の事なり
あつたれども其の事なり
あつたれども其の事なり
あつたれども其の事なり
あつたれども其の事なり
あつたれども其の事なり
あつたれども其の事なり
あつたれども其の事なり

安正始先んとして昭の別頭を後
サアノ所にも揚岩の襲撃おち
先一攻をき直なふ結りひ

作者
八文舎自共

文化十一年
戌乃青陽

系大坂上三系後者目錄

系大坂上三系後者目錄
系代早雲長天 系代布衣後物長天
系代大坂中の長天系代中村後物長天
系代大坂中の長天系代中村後物長天
系代大坂中の長天系代中村後物長天

系都 万葉天 系代長谷系都

▲二世一代

極上吉 飯東彦三郎

▲惣光氏

才上吉 行國仁光乃中

▲立役と結

上上吉 嵐 三入席白

上上吉 中山百苑中

上上吉 中山未女白

上上書

西の月ちぬともなふ為めり
嵐 借三席 白

上上書

喉危の兄ハ兄わととまふ次
小川吉右席 中

上上

常の声はまふれ 幸男
中山小三席 白

上上

るうてかくれりりり夜の月
中村 欽七 中

上上

位なりと足並に脊たまふ家
中山末老席 〃

上上

追りても急がふ方の跡
相の右桂十席 中

上上

おとれをりより(居)わつと
沢村徳三席 白

上上

おもはる人より別まはる
嵐 三右 白

上上

親もふも同下致子や極の湯
行墨嶋彦 中

上上

七軒や花でハ知えん人あらん
山科 紋六席 中

上上

おて理時見付より飯も
三井 系五 中

上上

浅尾 忠八席 白

上上

嵐 友十席 〃

上上

中山 段 市 中

上上

三井 死 彦 〃

上上書

市川 淳 彦 〃
一上 中村 福 松 〃

上上書

安魚 〃 郡
浅尾 五 右 席 白

上上書

末てよ又そのあはれ山内ら
中山 新 九 席 中
大谷 友 太 右 中

上上吉

扱もて中せり魚ド若りり
三井大八郎 中
門をこくを男小せりり

▲実欲弄々歌後之終

上上吉

中山皮尺席 中
大ぶりの去年の長女の白ひび

上上吉

浅尾五尺山 白
おろしをちりこたぬま生の猪

上上吉

嵐冠十席 白
ゆめかく死の夜はあまの

上上吉

嵐五尺八 中
手男撰ゆりし(笑)兵式

上上吉

斤屋小六席 中
去年の果のまをまをまを

上上

栄崎巻巻席 白
後あしはの中(回)りり

上上

相傳俊左席 白
精もつれりりも眠る夜明け

上上

嵐巻巻席 白

上上

坂東清巻席 白

上上

浅尾五尺十席 白

上上

沢村紀之介席 白

上上

浅尾五尺六席 白

上上

中村紫五席 中

上上

三井紋巻席 白

上上

三井勇巻席 白

上上

中山三尺尺席 白

上上

三井為尺席 白

上上

今村七尺席 白

上上

中山平三席 白

上上

中村三尺席 白

上上

尾上巻巻席 白

上上

三井十尺尺席 白

上上

三井伊巻席 白

京大坂丁十

正尚女善む正尚源善む

▲若女飛く邪

上上吉 中山ふいと中

見とれて月たれも晴免堂

上上吉 中村大吉 中

拵ぐや海と月夜のつりく

上上吉 叶 辰子 中

海とと茶小のつる核火

上上吉 沢村回之介 中

松咲て枕と衣より人ころ

上上寺 中村歌ふ 中

月ひとつむよりづらのと青火

上上吉 侍の川花妻 中

とよや茶のこぬと丸むのこ

上上寺 叶 三太夫 中

お枝の道小のぬく女而む

上上寺 尚 美三郎 中

糸はくく初これづ宛のる

上上 行 忠 忠 中

若船の涉東をこもひる火

上上 尚 福 中

芳沢ともゑ

上上 行 忠 三 中

若川半左支

上上 姉 川 大 中

これおれをのれゆとあまのむ

上上 行 忠 松 江 中

中村高木

上上 尚 小 雛 中

津川 勝代

上上 中 村 十 中

三条 高松

上上 叶 栲 右 中

よの知れぬ子のあまをすり

上上 芳 沢 高 中

風吹ぬ日お枝の柳を

上上

三条浪江 白

▲狼形若原方子後之記

昔見一夜の縁や梅の月

中村鶴助 中

中村欽助 中

之中小と云ふと云ふ今も

尾上耀三郎 白

深窓の中分れてや未花紅

嵐芳三郎 白

片尾万三郎 中

中村鶴三郎 中

本巻之成るは相の是を云

中村欽三郎 中

中山由之介 中

浅尾若三郎 白

長生のカたぐいや小松夷

三外時彦 中

片尾左吉 中

上

友川小三郎 白

上

叶八十次郎 中

上

中山新三郎 中

上

中村若次郎 中

上

相の若次郎 中

上

相の若次郎 中

上

中村鶴代 中

上

中村接尾郎 中

上

上 宍多三郎 白

上

中村若代 中

上

上 浅尾若三郎 白

上

上 浅尾若三郎 白

上

上 浅尾若三郎 白

上

上 浅尾若三郎 白

上

上 浅尾若三郎 白

上

上 浅尾若三郎 白

上

上 浅尾若三郎 白

上

上 浅尾若三郎 白

正中山源次郎中上茂庵長吉
正岸康次郎上岸修之次
正岸長市松上岸忠孝
正岸長重次郎上中山源次郎中

▲惣出之池

大上吉 中村政太郎 中

サ一斗量して重九段山内

大上吉 岸吉三郎 五

一斗二升と量るる所見

▲離子方之部

中ノ庄 西ノ庄

継子 鈴木万里 一斗 中村右兵衛
日 中村去次 一斗 鈴木佐吉
山 山本源三郎 一斗 徳村七三郎
中村子孫 一斗 徳村忠孝
無井大之郎 一斗 坂本清三郎

免相万蔵 一斗 文平好之次
中村伊之次 一斗 中ノ庄徳吉
西川嘉右衛門 一斗 中臣春吉
如田七三郎 一斗 岸百十郎
豊田孫次郎 一斗 徳村孫三郎
鈴木三三郎 一斗 名古左源三郎
小川竹三郎 一斗 徳村孝十郎
上田秀三郎 一斗 徳村忠孝
如井去次郎 一斗 中田信三郎
坂本右左衛門 一斗 坂本政吉
竹本式之次郎 一斗 上岸治平
岩竹秀次郎 一斗 岸修之次
竹中余太夫 一斗 住田忠太郎
徳沢大作 一斗 云々忠孝
徳沢源八 一斗 云々忠孝
徳沢源吉 一斗 云々忠孝

山村友之郎 一斗
徳山仲次郎 一斗

〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃
 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃
 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃
 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃
 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃
 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃
 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃
 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃

▲ 狂玄化有之部
 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃

並木半菘
 玄川泉女
 沢嵐市三
 田辺珠七
 奈川暗助
 大坂中の彦
 市松七

▲ 頭より之部
 奈河十吾女
 並木清菘
 壬松天去清
 奈河紗女
 並木重造
 奈河七五三女

浅尾繁菘
 浅尾重菘
 相の若桂十良
 中

千本花万茶乐叶

▲ 尚時 休之部

上上音 尾上彩七

上上音 浅尾重菘

上上音 中村榮五郎

上上 尚陽三節

衣之原中... 出出... 之始... 里...

小... 例... 之... 由... 尾... 上... 中... 去...

座平... 尾... 上... 中... 去...

師妹... 達... 大... 楚... 桂... 川... 五... 程... 柵... 上... 中... 下...

立役 市川登三節 立役 中山小三節

日 市川登三節 日 松徳三節

立役 市川登三節 日 泉川岩三節

立役 市川登三節 立役 三井光三節

日 中山紋十節 立役 百村友九節

立役 松徳松石三節 立役 中村九三節

立役 岩村岩三節 立役 坂东九三節

立役 中村悠三節 日 三井榮三節

立役 三井女三節 立役 中村仲三節

立役 松徳信三節 立役 三井光三節

立役 岩村掬八 立役 三井光三節

立役 沢村之乃三 立役 師川茂八

日 岩村市三 日 濱尾為三節

日 沢村茂三 日 三井小三節

日 山科三三 立役 沢村松三節

日 松徳吉三 立役 芳沢道三節

日 岩離子 日 尚半三節

立役 岩離子 立役 中村友三節

立役 岩離子 立役 中村友三節

立役 岩離子 立役 中村友三節

立役 岩離子 立役 中村友三節

立役 岩離子 立役 中村友三節

立役 岩離子 立役 中村友三節

立役 岩離子 立役 中村友三節

立役 岩離子 立役 中村友三節

立役 岩離子 立役 中村友三節

立役 岩離子 立役 中村友三節

立役 岩離子 立役 中村友三節

立役 岩離子 立役 中村友三節

立役 岩離子 立役 中村友三節

敬後 飯東正三

敬後 大谷虎次

日 斤岡政太郎

美後 浅尾元五郎

美後 浅尾金四郎

立後 柳山全盛

立後 行岡仁三郎

若後 尾上松次郎

若後 中村仙之介

日 荻野安三

日 嵐 龜吉

日 沢村春太郎

日 中山勝次郎

日 松浦大右

日 荻原 友三

若後 谷村留次

若後 友川龜松

若後 谷村市松

若後 友川龜松

若後 谷村市松

若後 友川龜松

若後 谷村市松

若後 友川龜松

若後 谷村市松

若後 友川龜松

若後 谷村市松

若後 友川龜松

若後 谷村市松

若後 友川龜松

若後 谷村市松

若後 友川龜松

若後 谷村市松

若後 友川龜松

若後 谷村市松

若後 友川龜松

若後 谷村市松

若後 友川龜松

若後 谷村市松

若後 友川龜松

若後 谷村市松

若後 友川龜松

若後 谷村市松

若後 友川龜松

若後 谷村市松

若後 友川龜松

若後 谷村市松

若後 友川龜松

若後 谷村市松

若後 友川龜松

若後 谷村市松

若後 友川龜松

若後 谷村市松

若後 友川龜松

若後 谷村市松

若後 友川龜松

若後 谷村市松

若後 友川龜松

若後 谷村市松

若後 友川龜松

若後 谷村市松

若後 友川龜松

若後 谷村市松

若後 友川龜松

若後 谷村市松

若後 友川龜松

若後 谷村市松

若後 友川龜松

若後 谷村市松

若後 友川龜松

若後 谷村市松

若後 友川龜松

若後 谷村市松

若後 友川龜松

若後 谷村市松

若後 友川龜松

若後 谷村市松

若後 友川龜松

萬壽八節芝振象三七近引日擲り付
等々々 数月より身仍り色紙より之
泥一七以余八思後

記
尾に

是の好人ありて例奉のぞく後
教世の徳ある初名小大坂長角中
多た高き三の勢りたる月利自得と
不徳あるくりく徳敗と記(西)一九が
殿座の徳あるありにく位付たる並の
甲して先ずせん(本)を修らむかく水
知く(記)は文とく徳あるその徳徳を
うらみ外なき例がれども二十津小て目出
なく一世代と改めし一(坂)東新水六の
縁と述せしより段々と不徳と仕せし事
[五]キ コリヤをトヤアふ徳が少く
ヤレ新お天待てあり外

▲一世代

極上上吉(印) 坂東彦三郎

記五 新お天の知名あることひに力にて
勢がふか(坂)東新水六の縁と述せし
一世代と改めし一(坂)東新水六の縁と述
の事の後者出情影ふ事や(坂)東新水六の
及ぶ徳あるを徳あると改め大坂表中の事
とせし出動ありくこの勢り返の徳あり
す(此)の勢りの徳ある事改の六外(本)に
二夜(幕)六外を命ふく古風な仕向と味
のひき(一)は(後)徳ある人改めし(一)とぞ
記五 切腹せんとて坂東新水六の縁と述
してあり(一)の徳と切腹せむ徳とや
(一)は(後)徳ある人改めし(一)とぞ
(一)は(後)徳ある人改めし(一)とぞ
二夜(幕)六外を命ふく古風な仕向と味
のひき(一)は(後)徳ある人改めし(一)とぞ
記五 切腹せんとて坂東新水六の縁と述
してあり(一)の徳と切腹せむ徳とや
徳とや(一)は(後)徳ある人改めし(一)とぞ
(一)は(後)徳ある人改めし(一)とぞ
二夜(幕)六外を命ふく古風な仕向と味
のひき(一)は(後)徳ある人改めし(一)とぞ
記五 切腹せんとて坂東新水六の縁と述
してあり(一)の徳と切腹せむ徳とや
徳とや(一)は(後)徳ある人改めし(一)とぞ
徳とや(一)は(後)徳ある人改めし(一)とぞ
二夜(幕)六外を命ふく古風な仕向と味
のひき(一)は(後)徳ある人改めし(一)とぞ
記五 切腹せんとて坂東新水六の縁と述
してあり(一)の徳と切腹せむ徳とや

道勳道尊を以て古くは言ふに成行の
 及び資を以てのりまこと入るに合れ
 此を以て言ふに及ばざるはくは
 く 徳を以て出る徳を以てはこれより一世
 一代として養ふ事をお世に代りて
 源を以て言ふに及ばざるはくは
 言ひしものと云ふお世の人お世の人の一世
 一代を以てお世の代りて言ふに及ばざるはくは
 此を以て言ふに及ばざるはくは
 江左の二世代もお世と自云ふ言ひ
 は云四段目の武徳源を以て言ふに及ばざるはくは
 此を以て言ふに及ばざるはくは
 所作の事徳源を以て言ふに及ばざるはくは
 故人を以て言ふに及ばざるはくは
 のの山を以て言ふに及ばざるはくは

もそを以て言ふに及ばざるはくは
 世例を以て言ふに及ばざるはくは
 此を以て言ふに及ばざるはくは
 此を以て言ふに及ばざるはくは
 此を以て言ふに及ばざるはくは
 此を以て言ふに及ばざるはくは
 此を以て言ふに及ばざるはくは
 此を以て言ふに及ばざるはくは
 此を以て言ふに及ばざるはくは

▲惣巻首

才上言 ○ 行長仁虎ら 中の巻

此を以て言ふに及ばざるはくは
 此を以て言ふに及ばざるはくは
 此を以て言ふに及ばざるはくは

百一十三日
假名平本忠臣藏
京四條
子重彦



中山
新
中山

小野道風青柳硯
京四條
大作
石作夕次宗初七反
龜袋左



浅尾おぐい
丑大人と夜

三右衛門
吉原
尾



沢村
七右衛門

京大正二

く、^{EVI}二のりり西勤の後の男足中の
枕を更振にてを江原式と和田とて言つた
女鉢木も大ありののすしやうしそあがう
ヒイキてもいせ奥のゆきあぬゆきを侍し
ところ々々にくはに申のうら草指しぐま
市中の勤まで昔西草とよと云つてこのゆきあ
ひあつたかありのく ^{EVI}系統の息とせよ
忠臣くく地伝せん友の先年も大て死ふてあ
しは亦くは後八十倍のや来にくく言つら
とも大ありのなれもあはけ別友あつらや
と二流の強うく ^{EVI}三日月の真まあは
りれてのしんわう足あの方うかんにんが
あはぬくしひてあさ ^{EVI}キは入月らんしと
侍での仕うら太へりくか跡と忠足合て
の慈ひあつたのあつと侍やうせぬく

二役の忠平ちりや分なく二役天川やあ
平の儀と男王と足(おとの)恨とつこれの
仕何とや女丈の情が有と ^{EVI}大坂表
中の更振の四月三日の夜敷史及び直振
ふんそたうと京とせ息ひ有さふ何かと
途行はとすく、^{EVI}望月下旬りの御日
貞義あ是はよくお成例奉のどく二月二
日か一の百小合よくいの中のをの忠とせ
御史の追て指平とすく、^{EVI}祇堂大おあふ
産がくくつと免取若考く

▲立役く部

上上吉 ^{EVI}嵐三入席 ^{EVI}百ッハ

^{EVI}系統未定人と立役の更振のゆきあ
あまのたにくくもあまのゆきあ
^{EVI}キヤレ侍てゆき嵐氏二の習の後づる

しもゆき勤なくいふと素よりぬきしうが
素朴むぶの良しそよぬるおそなるみあふ
つこしと記記を柳吹よの凡役ニ人自
なき後の所々にく用みそとの出合え
どつゆの舟にくぬり法とたぐこいどの
くまひえさうきこの仕口とさうやの
ふち外小仕となくよしと記記の
あざりのちもわらうとく結ぶゆのしと
記記 瑞々や赤中もさりのこしく一入
免やまのりやうとさうと記のきも免や
有さりののじや


上上声 中山百免 中

記記 三の替りののささるけりの役素が
かろく記記 三ノ口性かうく切ねま
いせがとを料ねたか上素とていこさう

改はと免ぬくろく切ねま後あや上佐伯
みさうはりのゆも丹波をのゆもやふた
下坂ののく又塔まを接りふと切ねまみさ
場の前境にく十八が右布と本首しと
切いせとどの押ねたみみもあはしと
記記 中のま振しくひらうか船田のしと
切ねま樹の招き西彦仁素役 百かめとの
く記記 記のさうとさうとさうか今あはしと
ゆきにさかるとさうとさうとさうとさう
ゆきのやねもゆきのゆきとさうとさう
新あ天二世代素素の割友代をまやとん
なくとゆの素とそと赤小ね忠のあさゆり
切まくのゆいゆきのたしく平とそとさ
ちれりまゆりやうと 記記 記のまゆり
序切のゆきとさうの役は改大ましくと光文

江下丁の石抄に在る人の浦に在りて
人殺仕立強よく擧ぐ候と云ふ事

二平くさうの母親とんとや分なく
形くてけり及取人互現まあるのみ
か


上上音  中山未命

此の序天のいふ大坂南と勤なく
さうの侍丹のまゝ二味天と在る

かゝる外太つまの擧ぐも市表あり
九月より傳中の入り内
下りし柳沢よりはれ二ア

左の源氏に在るはのり二及めう三ア
右村小者次切三アが人の遊は九月廿日

此の序天のいふ大坂南と勤なく
さうの侍丹のまゝ二味天と在る
かゝる外太つまの擧ぐも市表あり
九月より傳中の入り内
下りし柳沢よりはれ二ア

上上音  虎猪三郎

此の序天のいふ大坂南と勤なく
さうの侍丹のまゝ二味天と在る

かゝる外太つまの擧ぐも市表あり
九月より傳中の入り内
下りし柳沢よりはれ二ア

左の源氏に在るはのり二及めう三ア
右村小者次切三アが人の遊は九月廿日

此の序天のいふ大坂南と勤なく
さうの侍丹のまゝ二味天と在る
かゝる外太つまの擧ぐも市表あり
九月より傳中の入り内
下りし柳沢よりはれ二ア

半島に於てかくて縁し

上上士 ④ 小川吉右衛門 中

改二の長小の事一才由候もなく三の尺の
百性にかうく切狂ま今因り候もあてりあ
にくそまより角の長由候も物言押を
より同役 [E] 偶にて布引より因り候人
のせえと今因り候中の変更ゆくひら
ふかの長由候も物言三六のなるを扶
まよふのちと長由候ゆく [E] 長由と據
中より大役く小の薄のえ候と據を候
の長くみいあて免由くらを今り并ふし
候へ候と [E] 改二長由の長とせよ
忠長との據とみい大役ゆく二役のち
伴ふの事より由長を免ゆく更なる事
女中 [E] 長由長由候ゆて長由の由を
あて候り候ゆく [E] 長由とや有と候
より [E] 長由の事 [E] 長由 [E] 長由 [E] 長由
候は候人あて [E] 長由 [E] 長由 [E] 長由
かまると今り并ふ

上上 ⑤ 中山小三郎 中

改二の長小の事一才由候もなく三の尺の
百性にかうく切狂ま今因り候もあてりあ
にくそまより角の長由候も物言押を
より同役 [E] 偶にて布引より因り候人
のせえと今因り候中の変更ゆくひら
ふかの長由候も物言三六のなるを扶
まよふのちと長由候ゆく [E] 長由と據
中より大役く小の薄のえ候と據を候
の長くみいあて免由くらを今り并ふし
候へ候と [E] 改二長由の長とせよ
忠長との據とみい大役ゆく二役のち
伴ふの事より由長を免ゆく更なる事
女中 [E] 長由長由候ゆて長由の由を
あて候り候ゆく [E] 長由とや有と候
より [E] 長由の事 [E] 長由 [E] 長由 [E] 長由
候は候人あて [E] 長由 [E] 長由 [E] 長由
かまると今り并ふ

上上 ⑥ 中村歌七 中

改二の長小の事一才由候もなく三の尺の
百性にかうく切狂ま今因り候もあてりあ
にくそまより角の長由候も物言押を
より同役 [E] 偶にて布引より因り候人
のせえと今因り候中の変更ゆくひら
ふかの長由候も物言三六のなるを扶
まよふのちと長由候ゆく [E] 長由と據
中より大役く小の薄のえ候と據を候
の長くみいあて免由くらを今り并ふし
候へ候と [E] 改二長由の長とせよ
忠長との據とみい大役ゆく二役のち
伴ふの事より由長を免ゆく更なる事
女中 [E] 長由長由候ゆて長由の由を
あて候り候ゆく [E] 長由とや有と候
より [E] 長由の事 [E] 長由 [E] 長由 [E] 長由
候は候人あて [E] 長由 [E] 長由 [E] 長由
かまると今り并ふ

中の芝居小く大も又村上高田の
うのちよく場の布引と騒波の切
いせおんどのぬ林平中の芝居のりひら
ふふと及田のり小津のあ街を招き
いゆ女ののちもさあやうと改定
梅玉も芝居夫との事江戸又全く
目のよれりさうしく巴天とのあ丸の
とた芝居夫か下の芝居と進者進者
ありはれいばよ校れ揚ど状と龜井
さうぬのよもよく芝居夫のふ引也
ゆ校くの天役とほろれ進く時定
少くおひぐさく東の東長くさす侍
ゆめく二夜仁木多の引やうなく切振
るんごんもて歌くみかひふんこひり
トキ芝居夫病死して幼年のつら夜
由大久く改定省進をり幼年のあり
候とせられしわびとてる候と書を
付事す

上止 **中山素太郎** 中

改定二の替り屋敷親父二條と彼と此が
勤なく五月より伴舟の芝居まで二の夜
だのりつとこの終に奴作年の天役候
よく九月より公宗の尾書してをに候
我のる村小夜は候作のぶらうこのあ
十月よりわりのあふく廿四のち候
よんあうとせとせられしと録東始
のあせ忠信のりは引あうと二や
久が威事考る中かなく進く候と候
たうれてゆ未と候親父の両名をゆつ
と成す

上上 ② 相の答桂子席 中

相の答の長氏の敬候はゆふれなれども尚
良の世の華の立候と云ふは是れ之を縁を
致しやせとのを桂子席に昔より行く
くニテ口の首世にゆくはせんとははく
岩に及候るや之場を平次本まうのこや
まはにわら布のこち移せん友ひりかこ
傷を忍びぬらみ相の縁に大なる作を
了すの食分らや欲まう田下舟渡を
三下しはつる取巻門あらはの相尚
夫の丹作の侍士のあら又申す免橋の
のぬもぬくらんくはせりりも打候く
一度の取巻役のぬをまへ

上上 ③ 沢村は三席 中

沢村は夫のりぶたのぬわはぬす

支那 良の世のこ一候に候ひぬる事柳林
らこのこぬる候へつものなりとて見せしこ
二候のふこぬる候へつものなりとて見せしこ
のぬはつらぬのここのこややくの候へ
かぬる事三候に候へつものなりとて見せしこ
ぬる事三候に候へつものなりとて見せしこ
と成を以候候へつものなりとて見せしこ
たぬはつらぬのここのこややくの候へ
かぬる事三候に候へつものなりとて見せしこ

上上 ④ 山崎 三席 中

山崎の世のこ一候に候ひぬる事柳林
らこのこぬる候へつものなりとて見せしこ
二候のふこぬる候へつものなりとて見せしこ
のぬはつらぬのここのこややくの候へ
かぬる事三候に候へつものなりとて見せしこ

上上 ⑤ 斤長徳義 中

斤長徳義の世のこ一候に候ひぬる事柳林
らこのこぬる候へつものなりとて見せしこ
二候のふこぬる候へつものなりとて見せしこ
のぬはつらぬのここのこややくの候へ
かぬる事三候に候へつものなりとて見せしこ

上戸 山村政八郎 中

〔改〕 翌及くを以原式に采あわし
市の元の廿四等二百位の内位より

上 三中央系 中

上 浅尾豊八郎 中

上 嵐友十郎 中

上 中山辰市 中

上 三井徳蔵 中

上 嵐元市 中

上 市川東三郎 中

〔改〕 右の各中の御海へ進み入り
ヤセキの老成も情がらんやせ

〔改〕 美原と部

上上吉 〔改〕 浅尾五右衛門 中

〔改〕 高内実良の才一見の志ありや

〔改〕 毛柳伏とこの味あまの味で

〔改〕 二夜はえんたの女あどる凡のうを

と刃三夜は本にぬれ捨あかものにて

ふ系の物もよく肉のゆもあ所のうが

消と染よてのお役は一統と伝ぬりのか

白ねえしと一統の長とあまのうのう後

〔改〕 二夜編の女は信とあまのうの

外とあまのうと小うらに月山法寺玉を

やあなく右ねえと産とかく大でんて

そ後ありの青柳伏と伝は建づとあま

そと奥のうらんと信實とあまのう

宵とれと見れと追なうと七月のう

翌天屋うと増富流とあまのう市川辰

の尾といせんとあまのうとあまのう

中の芝居にしくひらふを推して候まうも
なぐり候しく 辰巳 田原を樹の招きよきや
八女うたねまがうがくにくお休とい言ふ
候まう田原うらひの外のあざねを
かゝりて入るものや 辰巳 名のつひの元田
孝を救ふを救うかたなくつゝこの節を
候まうおまはりなくつゝたもたぬうら
みや 辰巳 二夜将多田うらひをたてし
家の担ぎたるの時に候まう入るまう
赤粉の白とせよみやは地をま出ると
候の終は候まうたたら木に候まう候まう
よく切れまう名を折田九女のうらひ
尼お流し候まう候まう切まう候まう
たるとれまう仕目つゝとも候まう候まう
いたれまう候まう候まう 辰巳 せ付

まぬし 辰巳 せよまう 辰巳 至るまう 辰巳 の流
しと候まう 辰巳 至るまう 辰巳 大のせを付まう
まぬし 辰巳 の流し 辰巳 候まう 辰巳 候まう

上吉 辰巳 中山の九節 中

辰巳 中の芝居のうらひ候まう 辰巳 退き候
廿月まうに候まう 辰巳 候まう 辰巳 の終は候まう
つゝこの節を 辰巳 候まう 辰巳 候まう
四月まう 辰巳 候まう 辰巳 候まう 辰巳 候まう
退き候まう 辰巳 候まう 辰巳 候まう
まう 辰巳 候まう 辰巳 候まう 辰巳 候まう
赤のうらひ 辰巳 候まう 辰巳 候まう 辰巳 候まう
幼女の母 辰巳 候まう 辰巳 候まう 辰巳 候まう
たるとれ 辰巳 候まう 辰巳 候まう 辰巳 候まう
忠臣 辰巳 候まう 辰巳 候まう 辰巳 候まう
そり 辰巳 候まう 辰巳 候まう 辰巳 候まう

辰巳
辰巳
辰巳

三ノ目 目ノ元目ノ元とヤ分なく切拉云
及縁も土佐おだんおかつとん返を云で
かりやうと

上上座 ⑤ 三本六八篇 中

〔注〕 かなんとの清き水で命りやうはび入
初来り京報てまこと天助八申のう
幼く大返たは是振更忍にて下りいもせ
山のふも七冬た更しくと後とてんんり
東行田の是振更忍と公て出ら且返く
徐くま芳能くとは是振の大をりのと
時きし廻海道田紅夫とりのと京井やの
家名お獲いと馬道京お元はと京とせ
幼く京報て出幼いと馬道更より更三の
京大返は是振おれ廻と井信と京と
改名あつくと京と更振おつと先へ返く

砂念とあひまうとらば及もとの大のうと京
本と京由再幼て分井 〔三〕 赤本の住也
トヤリ心う目出とくくくくくくく

〔注〕 中の地是是振林幸夫と二層少く
を返原我は使と木のりつと二返若村小返
ようのうとく 〔京〕 長柄長者は門の原

若老の二返子代京と京も京とく 〔注〕
京報京之振京とせより出幼とて京とん
とて京海もはたの二返弁定のお三返

猪ちのつひきも是をといふ餘亦もなく
一徳と福ましく加古川平養の形も後
けうくぬと京少くおんいさうとく

〔五〕 先奉布のうへでも出れんや
かみ平養とや 〔京〕 丸屋月山一分の頂へ
おれれつとも信しく天の下結いしと指

尺あり目孔有り、又柄も元下丸も一統の
 奉うとて 記 進く由や信あり六ヶのやむ
 のよみあり、又夏衣の玉がたれやせふ
記 経をいひ打ておしやこ、

▲夏衣 并に 敵役く物

上上 記 中山 改立席 中

記 此本末のくはる衣衣下りありて
 改改の後の衣のよりとあり昔の習はぬ
 見ゆり物後仕しら子種ひ中、種々習は
 の見所あり 記 柳 今も昔も仕迄の
 性ぐふらわど遠く習はれども今の
 習はの及ぬ味もぐらゝる 記 九廿ア
 それゆゑ夏衣の上席 記 中 記 中
 せんかたをく 記 九二の巻く衣也
 衣改衣と改衣とをせとての仕しら

四五本にまきまき衣のやうくはらうら
 平に對をまわすおひつり月の人
 取のあひまのこの口も性ちんま
 しくいせ規とまの金の糸とやう
 仲長人の元徳中く中分は夏衣後箱
 紙衣は糸糸糸後よくをるの糸と信
 張る場は布引高性のみ又中の夏衣と
 ひらうか、挽糸平三式や、取改又と切取
 街の習はる衣衣衣衣衣衣衣衣衣衣衣衣
 屋敷衣は信持衣衣衣衣 記 衣 夏衣並
 の糸糸の糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸 記 知者
 糸糸糸の糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸
 月衣衣衣衣衣衣衣衣衣衣衣衣衣衣衣衣
 中衣衣衣衣衣衣衣衣衣衣衣衣衣衣衣衣
 衣衣衣衣衣衣衣衣衣衣衣衣衣衣衣衣

取をかく **【**ま **】** 京大坂の取をかく人
今より今の文更一文字も取をかく人
三夜もあつてこの切取を及ぶ人
一昨より夜更代おびんは本切あり
り通形なくとも毛のく通もはやく
免の免ぬやう有し

上上音 **○** 浅尾良山 **あ**

【取 **】** 取を柳取と云ふはもとより本切
取をかく取取ともなくしきむは中
分なく作りもふなり **【**記 **】** 建物の
芝居はくこの取を及ぶ人
とこの取を及ぶ浅尾良山の取をかく
切取を及ぶのぼり村長堂の取をかく
なまの取を及ぶの二夜取を及ぶ人
【取 **】** 取の取を及ぶの取を及ぶ人

二夜取の取を及ぶ人
の取を及ぶ人 **【**取 **】**

取の取を及ぶ人
丹後取の取を及ぶ人 **【**取 **】**

【取 **】** 取の取を及ぶ人
又取を及ぶ人

上上音 **○** 浅尾良山 **あ**

【取 **】** 取の取を及ぶ人
取の取を及ぶ人 **【**取 **】**
取の取を及ぶ人 **【**取 **】**
取の取を及ぶ人 **【**取 **】**
取の取を及ぶ人 **【**取 **】**
取の取を及ぶ人 **【**取 **】**

忌傳屋の由り人こそ取どつたさ
 ち柳屋の成二夜付のこふさ
 ち後れとて入付侍りつこのち後
 小うちさぐせつ絶望のち柳屋小下
 地二夜付の末に女を勤くさく候
 切替さおの成り候門津久
 ても四夜とも候よくを以候比全刺友
 二夜とた改切相支候はし勸ありと二夜
 古子屋めさつめさひひま考りばこ
 二夜九小力にささつち分た
 須子に候く候り候れと是のそたの
 して候り候也

上上書 虎 卷八 中

手お次にてせしやうり一の若く平山の
 武蔵守の二の三日にんか切替えせえ
 とらうの回をさ文候よく
 おうのひく
 厚の張作はつとを友後七も権忌候
 中の中屋の本さのまの丸の張河の
 場の事引、中回の若く二夜夫の若く二夜太
 中の夜ゆくひらさか候浪笑く人門の中
 おま身改候作は候くさく、樹の掃く
 危ちま今二夜お本屋候をさ八百屋候
 甥のちま置系がれさうづら系も下人
 二夜候のひまも候よく
 他せ途ひの紙屋取一流さあさびま在
 くとも声がらあひし
 二夜候よく候らつとをさく新あ夫

小つらふらたふふまのびり一系外等左
東のあせせとつらたふと龍小口とて
七等外等あくらう

上上 相寄依たる 〇

〔五〕伴舟との首の回へ年平山つら
漆が白らかりおのふて世々村上
多座とふすか想えん上へ出さぬ方
く川くしき他の松面性又世後よく
系級もがふとせはあ物

上上 龍 未差 〇

〔六〕龍小口へ手差夜ふ今以出くらう
上上 坂東清義 〇

〔七〕うきこのふお坂東夜かき柳花の
くぬ家八あとのそはあ長くひ星そのふ各
二夜とて死に女族後下女あつたうく
東のあせせ龍小口大根極志をいやく

上 坂東三郎 〇

上 沢村好女 〇

上 浅尾実心 〇

上 中村紫六郎 中

上 三井致義 〇

上 三井勇義 〇

上 中山泰三郎 〇

上 三中三郎 〇

上 今村七三郎 〇


上 中山泰三郎 〇

上 中村三郎 〇


上 尾上三郎 〇

〔八〕うきも退くはく思ひあきく細
鐘仕りを短く口の月流はあきく

▲若女取組歌

上上吉  中山下うと中の子

沢丸一の花と幾のあふあししくいせめんを
女うおんやうかぬく糸通て切程もあまを
ゆや、舟渡登あつぬし、しこのゆえく、はあ入
ての格別よく、是親夫、つらぬ、はら、舟渡
にく、渡舟、夫の忠告、親の情あり、八前、今
ゆい、そは、し、も、あ、ま、し、て、海、く、下、坂、あ、つ、て
を、う、た、ま、は、女、が、う、早、は、見、ひ、ら、か、ま、ち、と
か、う、の、二、夜、馬、の、路、邊、の、い、音、在、飲、を、婦、さ、
り、ま、ま、し、Eキ、夏、来、は、あ、か、う、ゆ、じ、く
と、ゆ、い、あ、ま、う、う、ぬ、海、で、ま、さ、E柳、に、元、目
松、と、そ、ぞ、う、ん、の、乃、の、か、づ、の、い、の、は、ら、り、の、う、
縁ヤ、糸、の、あ、い、せ、糸、長、く、か、や、い、か、う、ち、か、その
二、夜、と、も、大、坂、で、も、あ、の、せ、あ、い、れ、E又、く、い、あ、も
ら、う、の、し、E又、柳、Eその、は、い、て、伊、谷、を、あ、み、の
あ、ま、の、い、し、を、い、し、う、い、ち、に、ま、り、て、幸、と、あ、う、
し、う、あ、つ、た、平、平、恨、と、い、か、の、い、い、ひ、き、き、
ま、う、お、女、の、情、あ、く、お、か、く、E伊、谷、表、の
し、ぬ、が、糸、火、坂、と、ま、ま、女、が、こ、い、り、い、き、く

上上吉  中村大音 中

沢丸一の花と幾のあふあししくいせめんを
女うおんやうかぬく糸通て切程もあまを
ゆや、舟渡登あつぬし、しこのゆえく、はあ入
ての格別よく、是親夫、つらぬ、はら、舟渡
にく、渡舟、夫の忠告、親の情あり、八前、今
ゆい、そは、し、も、あ、ま、し、て、海、く、下、坂、あ、つ、て
を、う、た、ま、は、女、が、う、早、は、見、ひ、ら、か、ま、ち、と
か、う、の、二、夜、馬、の、路、邊、の、い、音、在、飲、を、婦、さ、
り、ま、ま、し、Eキ、夏、来、は、あ、か、う、ゆ、じ、く
と、ゆ、い、あ、ま、う、う、ぬ、海、で、ま、さ、E柳、に、元、目
松、と、そ、ぞ、う、ん、の、乃、の、か、づ、の、い、の、は、ら、り、の、う、
縁ヤ、糸、の、あ、い、せ、糸、長、く、か、や、い、か、う、ち、か、その
二、夜、と、も、大、坂、で、も、あ、の、せ、あ、い、れ、E又、く、い、あ、も
ら、う、の、し、E又、柳、Eその、は、い、て、伊、谷、を、あ、み、の
あ、ま、の、い、し、を、い、し、う、い、ち、に、ま、り、て、幸、と、あ、う、
し、う、あ、つ、た、平、平、恨、と、い、か、の、い、い、ひ、き、き、
ま、う、お、女、の、情、あ、く、お、か、く、E伊、谷、表、の
し、ぬ、が、糸、火、坂、と、ま、ま、女、が、こ、い、り、い、き、く

原七坂三十一

中野の事始にうららかなるにありてあ
 の後より武家の子と見えしや、あまの
 づつとあて今しよと切ねを御お招き入る
 女なりおれとつら唐鼓を操るるあつら
 かしこぞ **□** 夏原の海のお松もさ
 かななく御母がうらむ後かつと見えんよ
 とひ又もあまをまて今しよと操るあま
 女なりおれとつら唐鼓を操るるあつら
 びつとてねえなりなりあお動なくい
 めんどありけりあまのあつとせおれ
 へのあつとあまなく切ねえあまも又平
 女なりおれとつら唐鼓を操るるあつら
 流上原とはやういふに実情いふはし
 敷のひびきよくあつとひくあまも
 おつとあまをねがひやれと

上上音 ◎ 時 辰 子 丑

□ 春田原の春をまもむとてあまも
 ながもむとあまもあつらあまもあつら
 うねもあつらあつらあつらあつらあつら
 年をもあつらあつらあつらあつらあつら
□ 妙なるあまもあつらあつらあつらあつら
 念力があつらあつらあつらあつらあつら
 八月のあつらあつらあつらあつらあつら
 九月のあつらあつらあつらあつらあつら
 十月のあつらあつらあつらあつらあつら
 十一月のあつらあつらあつらあつらあつら
 十二月のあつらあつらあつらあつらあつら
 一月のあつらあつらあつらあつらあつら
 二月のあつらあつらあつらあつらあつら
 三月のあつらあつらあつらあつらあつら
 四月のあつらあつらあつらあつらあつら
 五月のあつらあつらあつらあつらあつら
 六月のあつらあつらあつらあつらあつら
 七月のあつらあつらあつらあつらあつら
 八月のあつらあつらあつらあつらあつら
 九月のあつらあつらあつらあつらあつら
 十月のあつらあつらあつらあつらあつら
 十一月のあつらあつらあつらあつらあつら
 十二月のあつらあつらあつらあつらあつら

ともほししこしの海がははかまて入る
の **海** 志の志をさし抑成お問候
ふさのゆかたせいのねたてあはれぬくら
分弁とゆかたの衣のゆかたをさくま
うまの衣もいとおうまのいり
ふでぬきし切替衣小又を夫人取の
儀とさるるまに **江** かりやの舟も
海よりしづ又は病氣ゆき効かく妙念

上上音 ○ 沢村田之助 白

海 ヤレ侍て候し **江** 江の海は地味
ゆきこの国もみかかへにての海はさき
日出度打合せ **天** 一茂 **江** 曙山
夫を化立辰とて執りて又は前の島の
にくちまをた散ちて又は大坂で候ま

それか悪女め候まの井も海はし **江**
中狂りの退きとられすぐさ上京て
江条山がまきむさあ **江** 狂ま候ま
嶽と遠山役大切石橋大蛇と強よく大合て
そ尾よくわつと考れしは江表申した
狂ちんれふの比よても退く候ま **江** 世
けり候ま **江** 年よりし **江** の衣のま **江** 候ま
刃とお候ま **江** **江** 曙山大の年
狂ま毎の本物より **江** 年ハ **江** 表の音
狂ま **江** の七変化とて **江** とも衣
狂のま **江** 候ま **江** 候ま **江** 候ま
二役す **江** 候ま **江** 候ま **江** 候ま
二やく **江** 候ま **江** 候ま **江** 候ま
の **江** 候ま **江** 候ま **江** 候ま **江** 候ま
刃 **江** 候ま **江** 候ま **江** 候ま **江** 候ま

大のうらまの写後よりうらまのうらま
ごまが太ちと忍ばし二夜かたやまのこて
あなはしこ二夜あつらふらはう十帖
原氏にやせし桂木ニやま枝け種のお後
ニつとけのほろすうこ何とまごもつれ
なく二夜目をせおほと娘のれひあいら
くしゆ故入仙女が物しあこまこ声を
よく知ことおのれひ暑中夜林にて
葉もよるんニやま風ニをん月三言り
毎日く 葉もよるをせつと見おまこつて
おとろ鹿を有娘とくまごをひくころわく
く衣巻のふひ付像やう先の仕門
一限のぬ切者由志夢さげの若ひここへ
や二夜更やう大門口とこ林のちや
かひくニ夜くすのせかた忍のゆえす
く二夜見町にくこの君の若らりへ
忍お種とてけりやうと事うめこそこの
九い交のまかりお公子おまよひいさ
仕らちもまこころとざらとせかれと忍おの
忍ことまよくけがうけのあつのいさ
え狂まふおれがもつと忍のつれをば
くふ附帯仕らうけをまよひまをん
原のゆきうくまをわかくおま
依田かまの大陸あかれと二夜更新ま
あんがうけをくと事ふや忍おがえやと
いひまをんおのゆきと忍男たこのまを
ねがうけなごう切やくのせといふ系
りりとカノ口上と愛は男子五作月の次村
後今と娘の娘長又来と道このい
あまおがうまの山とふあけのほくし海ま

まねて所作と面白く大坂人の九びの
 大徳田まげの九びと天門才の位も後り
 七後の才一太叔と大徳をとり弁おぼる
 にく指扇の神具能治の所作も大
 西より衣巻のつものたさる利かくは
 亥系教へ取とりハ江戸一統と勢念り
 中一に二段々まより及中まなく法のほり
 方々京に茶曲がなませの上方の大書者
 陪官大冠丸天祇子大来そ天一座にて
 多柳碓おまへ一後大切所作も七化ハ
 夜藝ううふのから三口始終江戸
 方々多く忠のつものくおまへ四も五の
 ほととやうく七化も仕らるが同どもで
 ころころ六の七七化のつをそそ致まへ
 てもちやうおのえがたはななり平う致
 後がくおりのがゆき響り来のあやうだ
 たきくおら良殿ころり目えがとりのまを
 遠りのび七化てなと一統とふねてあま
 丸也イヤおまげやの深が響のても来
 指が同どもうやのと忠にうもあれと曙
 山天女娘の情まごのま女まごのし物れ
 一とあつれ中八の九七化と
 うれをヨリやうう有まをうや一〇切おま
 かのやまういそん太孫うく丸小刀にん夫
 病来にくおまへ殿のま後うのく一
 まへをんかろしとさうう介れよ一京大坂
 一統と結ておまへ

上上寺 中村致 中

一段々大坂退く東中住山くま柳碓マ
 おくおまへ所しとこ編法おまへち小能治マ

小女と狐女がうろつ子あの子をさそい後
ついでともねてさるるをさそいねえと遠く有
馬島とせ東粒木の芝居もが中産(津島
あ見すしなれと何れもぞん放障あつてそれ
ゆへにれも直史勤かくゆをいせ(中
芝居をい泳我今直史と免をくも(中

上上非 侍の川死妻 中

利根太の本年は表衣田た(下り
あつてかの地の津く遠津の虎とゆくと
中目柳出後のま砂と生のお丑大
力どぶお市も杖をたつて勤れ(中
息とせの京に茶木の芝居と忠長と(中
けいとうぬ大をい(中)

上上中 時三右と(中

汲中(の芝居二のりり後(中
この一の谷と(中
ちの市のちて世田孝の芝居の夜衣(中
も柳石(中)も縁よく(中)カ(中)女房
アえれ(中)の(中)は(中)子(中)女(中)元(中)と(中)所
中(中)か(中)ら(中)や(中)女(中)も(中)め(中)ら(中)り(中)後(中)つ(中)く(中)免(中)は(中)を(中)ま
く(中)林(中)は(中)よ(中)

上上山 山崎三郎 中

汲中(の芝居(中)か(中)く(中)も(中)お(中)その(中)後(中)つ
と(中)も(中)ゆ(中)く(中)市(中)の(中)ち(中)て(中)世(中)田(中)孝(中)の(中)芝(中)居(中)
衣(中)縁(中)く(中)お(中)子(中)の(中)大(中)夜(中)と(中)あ(中)つ(中)づ(中)れ(中)の
後(中)新(中)七(中)夜(中)更(中)つ(中)め(中)茶(中)の(中)芝(中)居(中)と(中)せ(中)も(中)が(中)り
梅(中)り(中)附(中)の(中)名(中)お(中)八(中)尺(中)は(中)こ(中)が(中)芝(中)居(中)の(中)芝(中)居(中)で
子(中)も(中)女(中)娘(中)お(中)の(中)方(中)友(中)重(中)女(中)が(中)う(中)ま(中)あ(中)つ(中)る
三(中)夜(中)お(中)は(中)免(中)中(中)く(中)縁(中)は(中)い(中)れ(中)よ(中)う(中)り(中)及
中(中)

上上松 行見遊之文 中

深丸 渡原にかりや遊るべくく三光夫が
留下りの致すまのより夜を待た遊気の
と死後のおま作の田舎娘など此を令
すすまの命をせり人びとに傳へしと系のみ
とせ忠長くこ小浪うらなふ今片と

上片 山崎 福松 中

上片 芳沢ともゑ

上片 行園三吾

上片 友川半太夫

上片 掃川大吉

深丸 かなきも遊く由中長を云れを經
なくゆれせりこち名ふ

上上 芳沢十雄 中

深丸 一の若くはなや一なりぬくみ下の方

人ふよく布引のあひひのあひらふかの山
吹ハ高りすとて物と状の言のや中助の衣
太君太富米也(丑)女をう定女のもの候ハ
ふ介升と渡原の松と女が中の中芝指で
ひらふかのふんともぬらうと糸の糸とせ
糸と糸はは糸糸長くとせ目もかせハ
深丸 一とせも女の信あつくとふ糸糸
上上土 三條浪江 中

深丸 上 押碓つくのありと母紀及て
さつといふか子持川女むかやうえ門
ほくも月が夜やかたなく糸の糸とせも
まろりつこのあゆ三役切指さうりや又
らくして後何せなされても奉功あはれ
中かな

役者控 栗指鹿原 上上之巻 終

文化
甲戌

役者殺系不証

京
大坂

多子
39
9

門 十
源 志

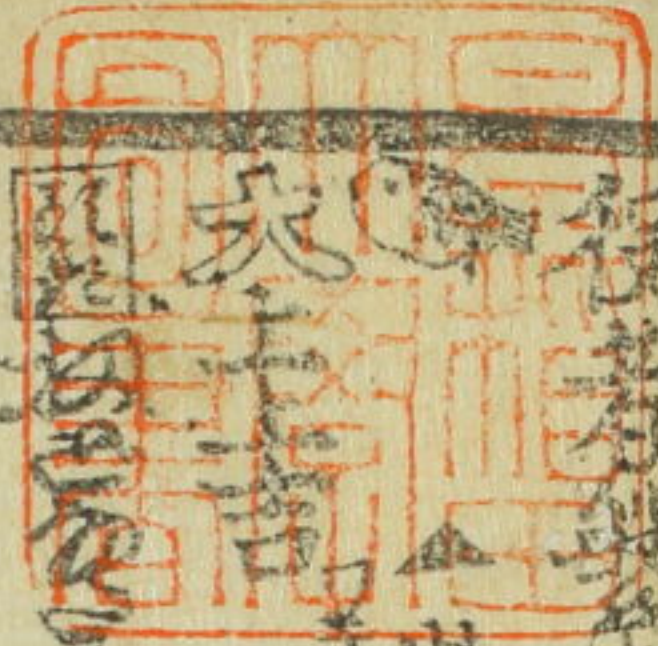
後者東家話中之卷

惣出袖

天正吉



中村歌の 中の



よふそとをいふはことなるに
多分詳しむるに
しりしに
なると
ま
教
し
な
一

Handwritten marginal notes on the left side of the page.

廿二日... 廿三日... 廿四日...
 廿五日... 廿六日... 廿七日...
 廿八日... 廿九日... 三十日...
 三十一日... 一日... 二日...
 三日... 四日... 五日...
 六日... 七日... 八日...
 九日... 十日... 十一日...
 十二日... 十三日... 十四日...
 十五日... 十六日... 十七日...
 十八日... 十九日... 二十日...
 二十一日... 二十二日... 二十三日...
 二十四日... 二十五日... 二十六日...
 二十七日... 二十八日... 二十九年...
 三十年... 三十一年... 三十二年...
 三十三年... 三十四年... 三十五年...
 三十六年... 三十七年... 三十八年...
 三十九年... 四十年... 四十一年...
 四十二年... 四十三年... 四十四年...
 四十五年... 四十六年... 四十七年...
 四十八年... 四十九年... 五十年...
 五十一年... 五十二年... 五十三年...
 五十四年... 五十五年... 五十六年...
 五十七年... 五十八年... 五十九年...
 六十年... 六十年... 六十年...
 六十年... 六十年... 六十年...

六十年... 六十年... 六十年...
 六十年... 六十年... 六十年...
 六十年... 六十年... 六十年...
 六十年... 六十年... 六十年...
 六十年... 六十年... 六十年...
 六十年... 六十年... 六十年...
 六十年... 六十年... 六十年...
 六十年... 六十年... 六十年...
 六十年... 六十年... 六十年...
 六十年... 六十年... 六十年...
 六十年... 六十年... 六十年...
 六十年... 六十年... 六十年...
 六十年... 六十年... 六十年...
 六十年... 六十年... 六十年...
 六十年... 六十年... 六十年...
 六十年... 六十年... 六十年...
 六十年... 六十年... 六十年...
 六十年... 六十年... 六十年...
 六十年... 六十年... 六十年...
 六十年... 六十年... 六十年...
 六十年... 六十年... 六十年...

六十年... 六十年... 六十年...

三ノ巻 三ノ巻 三ノ巻 三ノ巻 三ノ巻

三ノ巻 三ノ巻 三ノ巻 三ノ巻 三ノ巻

三ノ巻 三ノ巻 三ノ巻 三ノ巻 三ノ巻

三ノ巻 三ノ巻 三ノ巻 三ノ巻 三ノ巻

三ノ巻 三ノ巻 三ノ巻 三ノ巻 三ノ巻

三ノ巻 三ノ巻 三ノ巻 三ノ巻 三ノ巻

三ノ巻 三ノ巻 三ノ巻 三ノ巻 三ノ巻

三ノ巻 三ノ巻 三ノ巻 三ノ巻 三ノ巻

三ノ巻 三ノ巻 三ノ巻 三ノ巻 三ノ巻

三ノ巻 三ノ巻 三ノ巻 三ノ巻 三ノ巻

三ノ巻 三ノ巻 三ノ巻 三ノ巻 三ノ巻

三ノ巻 三ノ巻 三ノ巻 三ノ巻 三ノ巻

三ノ巻 三ノ巻 三ノ巻 三ノ巻 三ノ巻

三ノ巻 三ノ巻 三ノ巻 三ノ巻 三ノ巻

三ノ巻 三ノ巻 三ノ巻 三ノ巻 三ノ巻

三ノ巻 三ノ巻 三ノ巻 三ノ巻 三ノ巻

二五〇 念てしるは事か老(同)のてしるは事
[陸] 大者生中逢至病を付とこと終て果あり
多事煩ら申(小)生各別七深判りよる [三三三]
光生明公ぬる様は生(小)生各別七深判りよる [三三三]
そて切ねぬ(小)生各別七深判りよる [三三三]
大南(七)三三三 [三三三] 生各別七深判りよる [三三三]

○ま(三)生各別七深判りよる [三三三]
又(三)生各別七深判りよる [三三三]
これら(三)生各別七深判りよる [三三三]

大入(小)判りよる [三三三] 由肆

○ま(三)生各別七深判りよる [三三三]
又(三)生各別七深判りよる [三三三]
これら(三)生各別七深判りよる [三三三]
大入(小)判りよる [三三三] 由肆
○ま(三)生各別七深判りよる [三三三]
又(三)生各別七深判りよる [三三三]
これら(三)生各別七深判りよる [三三三]

別座

夫(三)生各別七深判りよる [三三三]

○ま(三)生各別七深判りよる [三三三]
又(三)生各別七深判りよる [三三三]
これら(三)生各別七深判りよる [三三三]
大入(小)判りよる [三三三] 由肆
○ま(三)生各別七深判りよる [三三三]
又(三)生各別七深判りよる [三三三]
これら(三)生各別七深判りよる [三三三]

ての佐らちしてふるくをたてあふふ
まゝまふかへまひつるをばい
まゝまゝまひつるをばい
まゝまゝまひつるをばい
まゝまゝまひつるをばい
まゝまゝまひつるをばい
まゝまゝまひつるをばい
まゝまゝまひつるをばい

。一寸清ひろくやある

續拾歌国図

自笑

つれづれに

壬刻
初編三冊

這書ハ歌存故ハいのれくはるすも
あつたつち方面白たよと午之空板の節何
とて取求取世見下まのやむ

▲當時体く都↓

上上音 尾上新七

以て 芙蓉夫ハまひくすや勤しく是扱

我が波のよ砂成故にや久長哉見月
遠く来意のまよとを深み五人切強
布引にまひつるをばい
でまゝまひつるをばい
瓦もまひつるをばい
まひつるをばい
より地江の廿四番まひつるをばい
まひつるをばい
木十友の二やも井路まひつるをばい
ゆか今まひつるをばい
乃れゆかまひつるをばい
まひつるをばい

よりあるは是れゆく身ものしよる物
見待すべし

上上吉

浅尾由又節

卯九 中の是れ三月ノ定勅にてこの谷にて
回入平左衛門様御いせんとてあは玉居小太
正遊正史文んかお役の御令よくその後
伊丹一様大産にてこの谷みごつたれの強
彦坂去六ありはの世四考之井上勢九之
村上老のつたれの強さすもうあまの扱又
去厚中くや子女扱之赤ありあつ浦
原より強御一つとておあはせとて
討つ面白くおあはせ也敬あり又其意の尺
扱と勅しれても子供よくおあは功が尺井
がふさぶのりおあはせして返るるは
浅尾由又節

上上

中村条を節

卯九 条を大産のありあつた扱あり
しく史のありは御令とておあはせ御
筆はよりしくお敬ありは御入小うら小
ま中つ戸八くも扱扱ふあつた産者はく
がふもまれのあつたを治つた強さすもう
中上御勅かくおれを中村条をくつた
女がご大名人のおあはせは御あつたの御定
見て扱子のりさつたて介介介介の意はは
よふはと勅を待すべし

上上

山崎勝三節

卯九 勝三のあつたは御令とておあはせ御
介のあつたは御令とておあはせ御
あつたは御令とておあはせ御
あつたは御令とておあはせ御

以下てらんとや上まを

天正復元根生の元祖中山安七失天の二年
との秋自下りてせびたはるる今は大あり
それより系れ東山谷河内より上国居りこれ
之の系れなる世をあらはし居るは是に系

又北十年四月九日
釋 淨光 俗名 中山安七

行年 八十二
碎世 八十九 復元二年のころより

おき流るるがめはあつても居るが全を
存くことなればるるを命のほりて居る
和安永天明と云々毎年の事の御徳は
艦を成りし所をあらはし居るは是に
きりてはるるの所をあらはし居るは
この中山由男代柱言録 全部 下所
かゝるはるるの事と云々なる事
よりなる事なる事なる事なる事

後者敏の米詔附録

天正復元根生の上よりなる事なる事なる事
方の事なる事なる事なる事なる事なる事
毎年の御徳なる事なる事なる事なる事なる事
引ふるはるるの事なる事なる事なる事なる事
らるる事なる事なる事なる事なる事なる事
ことなる事なる事なる事なる事なる事なる事
ぬるはるるの事なる事なる事なる事なる事なる事
事なる事なる事なる事なる事なる事なる事

大谷安七

御徳

宗三権月吉日 奉書 御徳 有内
康中
御徳 有内
御徳 有内

中野安七の御徳なる事なる事なる事なる事なる事
以上はるるの御徳なる事なる事なる事なる事なる事

御徳

御徳

越後の津利をよき事とせしむるを
例にぞりまるといふは越後の津利の島
ちて津をよき事とせしむるは例にぞり

近江源氏左陣大加

中村秋成の

越後の津利をよき事とせしむるを
例にぞりまるといふは越後の津利の島
ちて津をよき事とせしむるは例にぞり
船をよき事とせしむるは例にぞり
越後の津利をよき事とせしむるを
例にぞりまるといふは越後の津利の島
ちて津をよき事とせしむるは例にぞり
船をよき事とせしむるは例にぞり

越後の津利をよき事とせしむるを
例にぞりまるといふは越後の津利の島
ちて津をよき事とせしむるは例にぞり
船をよき事とせしむるは例にぞり
越後の津利をよき事とせしむるを
例にぞりまるといふは越後の津利の島
ちて津をよき事とせしむるは例にぞり
船をよき事とせしむるは例にぞり

越後の津利をよき事とせしむるを
例にぞりまるといふは越後の津利の島
ちて津をよき事とせしむるは例にぞり
船をよき事とせしむるは例にぞり
越後の津利をよき事とせしむるを
例にぞりまるといふは越後の津利の島
ちて津をよき事とせしむるは例にぞり
船をよき事とせしむるは例にぞり

中山谷の命

○此に至る所の御所のくは谷を升陽野
まのり出をすわやう身かおる
公をたかおる
○此の谷は中山谷と云ふ事なり
○此の谷は中山谷と云ふ事なり
○此の谷は中山谷と云ふ事なり
○此の谷は中山谷と云ふ事なり
○此の谷は中山谷と云ふ事なり

中山谷の命

○此の谷は中山谷と云ふ事なり
○此の谷は中山谷と云ふ事なり
○此の谷は中山谷と云ふ事なり

桐の谷の命

○此の谷は中山谷と云ふ事なり
○此の谷は中山谷と云ふ事なり
○此の谷は中山谷と云ふ事なり

○此の谷は中山谷と云ふ事なり

○此の谷は中山谷と云ふ事なり

中山谷の命

○此の谷は中山谷と云ふ事なり
○此の谷は中山谷と云ふ事なり
○此の谷は中山谷と云ふ事なり

中山谷の命

○此の谷は中山谷と云ふ事なり
○此の谷は中山谷と云ふ事なり
○此の谷は中山谷と云ふ事なり

三井大の命

○此の谷は中山谷と云ふ事なり
○此の谷は中山谷と云ふ事なり
○此の谷は中山谷と云ふ事なり

中山後部

堅法大にのちお後手あるうやうのにお
まへにおもて申するに分るもあつた
うみさも申せぬ中後とて言はれ

行部小糸

堅法改系さるは練う河守も遠敷さ
二月にさよまをて名乗る命をうけ
ては三月に終平は村入びるは海
のそとをさるは練う八月に北
のそとをさるは練う八月に北
よふたへ出て旅よやまのあ
津出草とて今ある

青田八

堅法改系さるは練う河守も遠敷さ

けはなれぬいものいふもあつた
くはよとてさるのあつた
あつたといふあつたといふあつた

中山新部

堅法改系さるは練う河守も遠敷さ
今道にさるは練う河守も遠敷さ
侍もあつたといふあつたといふあつた
いふあつたといふあつたといふあつた

行部小糸

堅法改系さるは練う河守も遠敷さ
二月にさよまをて名乗る命をうけ
ては三月に終平は村入びるは海
のそとをさるは練う八月に北
のそとをさるは練う八月に北
よふたへ出て旅よやまのあ
津出草とて今ある

法隆川記

此は法隆川記の序文に於て

序文

此は法隆川記の序文に於て

山内記

此は法隆川記の序文に於て

山内記

此は法隆川記の序文に於て

山内記

此は法隆川記の序文に於て

山内記

此は法隆川記の序文に於て

山内記

此は法隆川記の序文に於て

この序文は法隆川記の序文に於て

山内記

此は法隆川記の序文に於て

山内記

此は法隆川記の序文に於て

山内記

此は法隆川記の序文に於て

山内記

此は法隆川記の序文に於て

山内記

此は法隆川記の序文に於て

山内記

此は法隆川記の序文に於て

山内記

此は法隆川記の序文に於て

山内記

此は法隆川記の序文に於て

山内記

此は法隆川記の序文に於て

東西く

いろは國字忠臣義

狂西堂芋田畫 四冊

忠臣義の序大序ありて方幼き
のころもうそをせ給ふはしき
すしづきことありてむうし
名人の仕立も多敷なりし
婦人の觀も優大

小栗外傳 七冊

同後篇 五冊

小栗判官にて第一代徳の
おもしかりき給入ありて
大成西月二日ありし
中しゆ求み給えり

名代 忠臣義の義内大芝居

名代 忠臣義七太夫
松本屋治太夫 彦本市川新義

○見立系の娘より花のど

▲忠臣義更歌後若女歌況雜

大上上吉 岩井半四郎

ふいふとの沙汰が光りやく物日

上上吉 沢村四郎又郎

一巻の巻物にぬと 折巻

上上士 市川宗三郎

ふいふのむくうしぬ 高直

上上士 佐の川花妻

宛へあれど美のかい 山吹

上上 坂東屋十郎

口竹がいで町中の縁々永仙

上上 三井大右衛門

義の仕やし生立のよき後義

上上 市川栗義

上上

何と云せてもそのとらふに非ざらん

上中

岩井忠次郎 春風

上

岩井芳次郎 玉根

上

沢村隆六郎 冬枯

上

市川新蔵

上

上尾上安之介 上尾川成蔵

上

上尾村紀治 上尾上仙蔵

上

上尾村紀之介 上坂本宗次郎

上

上依の川徳八 上相馬昌治

上

上沢村隆蔵 上市川純六郎

上

上中村百蔵

上

子役 邪

上

岩井扇之助

上

▲物志 松平章四郎

上

▲物志 松平章四郎

上

▲物志 松平章四郎

上

▲物志 松平章四郎

上

▲物志 松平章四郎

困

名

名古屋表巻津葉栄山付中にて

芝居進く真仍して去反の跡しく江戸

表の當附の大直有跡外夫杜が失事

上り有て六月の八月進打は兒大當り

はく玉中の勿論京大坂を介伴勢勇

深三河玉より水見初は出たがこれ縁以

中一の名古屋の巻の扉口く

いふでもあまてある巻紙の大和屋を

あり

巻紙とありくす

松平

名

大上上吉 岩井才四郎

岩井の苗の抜と申うか比が去てはか()を
 今やくと侍て形中ぞ 比 申と去ル由
 申れ方()人の辨後を習り月とよま
 てテチ扱もく()いふトやあふん()と
 尺ぬ画まこがれて侍て形()い()
 杜()を()とい() 比 永()
 び()ち()は()の()を()上()
 名()岩井()とて()七()の()
 の()を()か()く()
 故()の()大()子()
 ら()十()の()月()
 月()に()

役もなく()に()
 出()文化()の()
 君()岩井()
 を()
 侍()
 お() 比 比
 小()
 以()
 河()
 侍()
 女()
 上()
 お() 比
 夫()

らぬとお察久妻の七夜あつりりしく
上の巻柳傳鬼子母神臨門のどえり
神田振地登りくはくおを免の役
免及下女免妻夫とよ引れ出て
本が石の鳥居の門をいつとあがると
久妻とて出向くつとてお女中付
川後ほく主人市代系の出芳し女夫を
依りしれ又鳥居の門をいつとお後
取上げ官之度三夜のあつり一々案の
りやう尺お一統と我を扱す 三折
お後の折へ免友の方を志りして能
うのことや 三折 成りて修られ
も中各均もり 三折 ども一 三折 かの
月 三折 中 三折 中 三折 中 三折 中
杜 三折 夫 三折 夫 三折 夫 三折 夫

より 三折 介 三折 介 三折 介 三折 介
と 三折 かつ 三折 ひ 三折 て 三折 なく 三折 巴 三折 夜 三折 の 三折 折 三折 一 三折 一
長六の 三折 子 三折 と 三折 終 三折 ぢ 三折 上 三折 々 三折 金 三折 毛 三折 く 三折 も 三折 三 三折 折 三折 ナ
所 三折 人 三折 と 三折 三 三折 折 三折 上 三折 々 三折 中 三折 り 三折 名 三折 を 三折 上 三折 て 三折 た 三折 二 三折 也
女 三折 ぢ 三折 古 三折 女 三折 の 三折 名 三折 あり 三折 三 三折 折 三折 中 三折 女
て 三折 も 三折 三 三折 折 三折 中 三折 女 三折 ぢ 三折 三 三折 折 三折 中 三折 女
に 三折 三 三折 折 三折 中 三折 女 三折 ぢ 三折 三 三折 折 三折 中 三折 女
ぞ 三折 三 三折 折 三折 中 三折 女 三折 ぢ 三折 三 三折 折 三折 中 三折 女
一 三折 三 三折 折 三折 中 三折 女 三折 ぢ 三折 三 三折 折 三折 中 三折 女
あ 三折 三 三折 折 三折 中 三折 女 三折 ぢ 三折 三 三折 折 三折 中 三折 女
ゆ 三折 三 三折 折 三折 中 三折 女 三折 ぢ 三折 三 三折 折 三折 中 三折 女
る 三折 三 三折 折 三折 中 三折 女 三折 ぢ 三折 三 三折 折 三折 中 三折 女
ふ 三折 三 三折 折 三折 中 三折 女 三折 ぢ 三折 三 三折 折 三折 中 三折 女
三折 三 三折 折 三折 中 三折 女 三折 ぢ 三折 三 三折 折 三折 中 三折 女
は 三折 三 三折 折 三折 中 三折 女 三折 ぢ 三折 三 三折 折 三折 中 三折 女

中の子きり、おどけよきて見あすも
あんどくくしあすくやきく、あきても
あの中へいれぬとの四本の海あく

川邊六段又まき号の振かゝりておま

の出もよく七段まおくおらくはて海平

ま法中との出合恵孫のまじりの田を

おどりのよまふすねてもたふまじりか

あこまけく、おまき下や **まき** 横巻の小

所振へおの外上おに、まうとあまひ

親杜あま代々の獲て是近上方少く

を養や里おのせしれ、おはまきうらひ

たぐくく、おまきす、おま女とあて海

川境少くあまの、お地産のよまふ

所まは流死の、おま巴あまの、おと上

トヤとへ **おま** おまの執まふ、おま川を

おまおまおまおまおまおまおまおま

おまおまおまおまおまおまおまおま

おまおまおまおまおまおまおまおま

おまおまおまおまおまおまおまおま

おまおまおまおまおまおまおまおま

おまおまおまおまおまおまおまおま

おまおまおまおまおまおまおまおま

おまおまおまおまおまおまおまおま

おまおまおまおまおまおまおまおま

おまおまおまおまおまおまおまおま

おまおまおまおまおまおまおまおま

おまおまおまおまおまおまおまおま

又五世の世の中へ 川吉 長を
ぬきの乃ち成でなく町娘のるひ入替ふ
せりては方どもおぼしつゝ 井と 新
はすみ女がうららぬの 川吉 ありんく
どのや まゝ ぬ指でもまに入を咥く
見印 ふゝ後史とのわく方と愛てぢ
と無の方の ま ひんさんと ま へさんど
大頃の是れと先年文家の侍の時き
うめとか ま へ ま へ ま へ ま へ ま へ
川吉 存下 井と ぬ 井と ぬ 井と ぬ 井と ぬ
妙押とつふ系申して友女小町の 井と ぬ
人おそれ 井と ぬ 井と ぬ 井と ぬ 井と ぬ
がと 井と ぬ 井と ぬ 井と ぬ 井と ぬ
あ 井と ぬ 井と ぬ 井と ぬ 井と ぬ

双巻して 井と ぬ 井と ぬ 井と ぬ 井と ぬ
ふ 井と ぬ 井と ぬ 井と ぬ 井と ぬ
の 井と ぬ 井と ぬ 井と ぬ 井と ぬ
あ 井と ぬ 井と ぬ 井と ぬ 井と ぬ
疏 井と ぬ 井と ぬ 井と ぬ 井と ぬ
史 井と ぬ 井と ぬ 井と ぬ 井と ぬ
大 井と ぬ 井と ぬ 井と ぬ 井と ぬ
こ 井と ぬ 井と ぬ 井と ぬ 井と ぬ
大 井と ぬ 井と ぬ 井と ぬ 井と ぬ

上上吉 井と ぬ 井と ぬ 井と ぬ

井と ぬ 井と ぬ 井と ぬ 井と ぬ
が 井と ぬ 井と ぬ 井と ぬ 井と ぬ
と 井と ぬ 井と ぬ 井と ぬ 井と ぬ
そ 井と ぬ 井と ぬ 井と ぬ 井と ぬ
小 井と ぬ 井と ぬ 井と ぬ 井と ぬ

まは六く出づ所を尋しこそ後日
我聖宗を説きて下られ相子大川合殿
以村に汝文化の己の冬に
宿のみち屋夫のりり
かち山村友かんと
及の大頂の聖宗
てあまを
づれと
友と
足て
よく
なり

まは六く出づ所を尋しこそ後日

我聖宗を説きて下られ相子大川合殿

以村に汝文化の己の冬に

宿のみち屋夫のりり

かち山村友かんと

及の大頂の聖宗

てあまを

づれと

友と

足て

よく

なり

我故も後まか
男も
白井
の家
く
丁
當
厚
く
上
此
あ

我故も後まか

男も

白井

の家

く

丁

當

厚

く

上

此

あ

上上士 命川宗之師

此物の経の野渡而伯足鬼つ後五
あのも

粟蔵を失て候と認めれずし一に板八汝
 の候は後儀也の故ありとわしるるは竹
 取年切が足すしとす出長権柄が友
 三のせめれとらふにいとてし^断
 お波の御父の故ありしに累二十兩や
 二板と候さるゝ大板なとて大なるれ
 二のうりの多き例ありと承く候とられ
 てもとを上方凡の^三と候がたにおはな
 失く上下はよく美と足せし魚の仕
 ろり柱を敷する連ふのりごとやま
 ーし一に板のうりの重く候仁後にく
 長人の月給を^三と承く候と後男
 の^三と承く候との外とて^三
 市川友藏よりのおと上とやせ
 上上仕 佐の川花妻

^三板おつた大芝振の取物少く去り
 江戸赤田屋の取物也^三と承く候と
 も^三と承く候と^三と承く候と^三と承く候と
 一と承く候と^三と承く候と^三と承く候と
 尺く^三と承く候と^三と承く候と^三と承く候と
 取出の^三と承く候と^三と承く候と^三と承く候と
 押さ^三と承く候と^三と承く候と^三と承く候と
 が^三と承く候と^三と承く候と^三と承く候と
 の^三と承く候と^三と承く候と^三と承く候と
 な^三と承く候と^三と承く候と^三と承く候と
 生^三と承く候と^三と承く候と^三と承く候と
 尺^三と承く候と^三と承く候と^三と承く候と
 く^三と承く候と^三と承く候と^三と承く候と
 め^三と承く候と^三と承く候と^三と承く候と
 と^三と承く候と^三と承く候と^三と承く候と

上上 四竹 坂東屋十節

新待て候へく [註] 一とぬが電を
男のへり別後も為り見とるさ出さるが
落くくと一統と声ばかりきいてを
も多くこのぬれどぐうくも新あまの
今くはあゆより四月足ぬる浦橋
を依にく歩平りのおのしつわう
にくく休連続の細川のぬえ後ちと
口竹がまはこもこれと遠い方がへん
しく切程をい渡さるさ見久作候て
るあまより重なるさ死なうはら
久と出さるれ [註] 二とぬが電を
後を [註] 三とぬが電を
ゆをへ給より [註] 四とぬが電を
あはれ [註] 五とぬが電を

名古屋中一統と候 [註] 一とぬが電を
あはれ [註] 二とぬが電を
あはれ [註] 三とぬが電を
あはれ [註] 四とぬが電を
あはれ [註] 五とぬが電を
あはれ [註] 六とぬが電を
あはれ [註] 七とぬが電を
あはれ [註] 八とぬが電を
あはれ [註] 九とぬが電を
あはれ [註] 十とぬが電を

上上 二本只本節

[註] 一とぬが電を
あはれ [註] 二とぬが電を
あはれ [註] 三とぬが電を
あはれ [註] 四とぬが電を
あはれ [註] 五とぬが電を
あはれ [註] 六とぬが電を
あはれ [註] 七とぬが電を
あはれ [註] 八とぬが電を
あはれ [註] 九とぬが電を
あはれ [註] 十とぬが電を

にて他どのの殿方の役なりと云ふもなき
細川備左の者の役も又てい果てのつら
豆をく役をばく山をき法と云はれり
中もなされと云ふも云ふもあつて
法出せが出来と云ふありと云ふもあ
びけらしと云ふ

上止

市川重本義

此はけいふ去りて高池谷を府主と
男女義兵衛といふは是其の流田の流
つと云ふ流と云ふは役をさへよく
白井柱八の流を流の流の女の流を
やくと云ふ流と云ふは合流といふと云
は流の引をさへさへさへさへあり
ゆと云ふと云ふの仕やと云ふと云ふ
と云ふは流の流と云ふと云ふと云ふ
出さるくと声がかかりたり

上止

岩井龜三郎

此は村お美山の人といふは侍を頼り
傾城も流と沖の井の役をばく流村や
つと云ふ流と云ふは流をさへさへ
上止 岩井龜三郎
此はけいふ村お美山の人といふは侍と云
名の田のたてを流と云ふは流と云ふ
四と云ふの流と云ふは流と云ふは
の及中の流と云ふは流と云ふは
柱八の流と云ふは流と云ふは

上

沢村深八郎

上

市川新義

上

岩井龜三郎

此は沢村氏といふは夫の流の人を流

猿の成修りおぼろふとて及松野宮
の通つゝの鳥にもせむかゝる白井
柱八の奴形を及ふいそし市川長
海井史直口ゆもふやうに思ふ
片本史直史直のころのゆへに史直史直を
かみ井史直史直の子史直史直つと免
史直史直史直史直史直史直史直
岩井史直史直史直史直史直史直
とや井史直

▲惣巻油

極上上吉田 松本末四節

大正一 今約りつゝつとす松本末四節
松本末四節のつとす松本末四節
松本末四節のつとす松本末四節
松本末四節のつとす松本末四節
松本末四節のつとす松本末四節
松本末四節のつとす松本末四節
松本末四節のつとす松本末四節
松本末四節のつとす松本末四節
松本末四節のつとす松本末四節
松本末四節のつとす松本末四節

ふのりり五六本引まゝ二張つゝ史直史直
かまゝといふつとす松本末四節
史直史直史直史直史直史直史直
上子と及ふれつとす松本末四節
つとす松本末四節のつとす松本末四節
つとす松本末四節のつとす松本末四節
つとす松本末四節のつとす松本末四節
つとす松本末四節のつとす松本末四節
つとす松本末四節のつとす松本末四節
つとす松本末四節のつとす松本末四節
つとす松本末四節のつとす松本末四節
つとす松本末四節のつとす松本末四節
つとす松本末四節のつとす松本末四節

戊の島にせよ日向後夫の巻に子分と成
 忠文の子ま日れはく對立し又文字を
 考てしちふ子た下やとく子佐の時
 より得てく日八夫のくーヤリしあ
 流於のふこ入物て去大防虎と取勤
 ぼくてぬ四辰どーえ張して老は固屋
 ぼて立役の初に入進くま男して享和
 え万のみを村をたてふ代目松が幸に
 帝となしれしと天祚分つこくまよく
 義海と親を升る既休を競に仁本陣
 ぶ危の役は是進に方表にくの救ふ涉
 勤にくと老き男し一役をぬるるあ若も
 なく後瑞の姿をうりても久立お採
 うこく及く忍取てん伯胤ぶあいの
 長上下胤ちり先人の着附とて死に及

くりせり上と処小すごく改業とあやま
 びんとあまのひの幕たる左へあひく
 このるるのき固地くことこの目と女一と
 じやしくと唱のり止せむ道掃親かぐ
 毎の日申秋たふの収来トヤと計はつこ
 しく忍取てん伯胤ぶあいの敏て
 係書係判の事取れ掃えくのひはしれ
 赤白せしと処のりくたてこが然しひ
 ちうな役と取てり親せし原たこころり
 ぶのく上下ましく世の全群もあふ
 処く時をを時ふせしと処のんまお龍の
 越がまをふせと忍取ての海り上ふな
 仕中ふは方とふのあまーとたてくちち
 せは忠告にやたりかんせん一林幸や臨寛
 のかふふちとせと忍取ての海り上ふな

こゝろの史ぬく 辰五 二夜福川
 夜を初日と勅にく切に後
 二夜申居候にこゝろ有能なる所人
 凡の梅柳女の辰一すとして喧嘩の
 あい新うさば後二夜をあり申の
 へゆんもさめたりうく二夜鬼門の赤
 らまはくたをこやの辰五今月代あり
 のくゑりの梅へさうくそのこん悟り
 泳く門の辰五申居候りて来てかき
 そこのふてぬる返は辰八所中一流の所
 脱びて分弁る 辰六 是は辰八かきを弁
 するものもたき 辰七 目出の辰五辰
 ても考能でもけりぬく 辰八 二夜
 法中の辰五辰八の辰五辰八ひする
 と八辰五の辰五辰八の上をて来きあど

小でこの辰八もたけ辰五来きまかも
 ちまもゆりぬく 辰九 辰五辰八辰九
 こせもても考能も辰八辰九辰十
 こゆりぬく 辰十 大由横辰名の辰
 戸の辰五辰八辰九辰十辰十一辰十二
 と辰の辰五辰八辰九辰十辰十一辰十二
 四八日の上辰八辰九辰十辰十一辰十二
 く是の辰五辰八辰九辰十辰十一辰十二
 侍連の辰五辰八辰九辰十辰十一辰十二
 あがも辰五辰八辰九辰十辰十一辰十二
 うめとすか辰八辰九辰十辰十一辰十二 辰十三 辰五辰八辰九辰十辰十一辰十二
 すか辰八辰九辰十辰十一辰十二辰十三辰十四辰十五辰十六辰十七辰十八辰十九辰二十辰二十一辰二十二辰二十三辰二十四辰二十五辰二十六辰二十七辰二十八辰二十九辰三十辰三十一辰三十二辰三十三辰三十四辰三十五辰三十六辰三十七辰三十八辰三十九辰四十辰四十一辰四十二辰四十三辰四十四辰四十五辰四十六辰四十七辰四十八辰四十九辰五十辰五十一辰五十二辰五十三辰五十四辰五十五辰五十六辰五十七辰五十八辰五十九辰六十辰六十一辰六十二辰六十三辰六十四辰六十五辰六十六辰六十七辰六十八辰六十九辰七十辰七十一辰七十二辰七十三辰七十四辰七十五辰七十六辰七十七辰七十八辰七十九辰八十辰八十一辰八十二辰八十三辰八十四辰八十五辰八十六辰八十七辰八十八辰八十九辰九十辰九十一辰九十二辰九十三辰九十四辰九十五辰九十六辰九十七辰九十八辰九十九辰百辰百一辰百二辰百三辰百四辰百五辰百六辰百七辰百八辰百九辰百十辰百十一辰百十二辰百十三辰百十四辰百十五辰百十六辰百十七辰百十八辰百十九辰百二十辰百二十一辰百二十二辰百二十三辰百二十四辰百二十五辰百二十六辰百二十七辰百二十八辰百二十九辰百三十辰百三十一辰百三十二辰百三十三辰百三十四辰百三十五辰百三十六辰百三十七辰百三十八辰百三十九辰百四十辰百四十一辰百四十二辰百四十三辰百四十四辰百四十五辰百四十六辰百四十七辰百四十八辰百四十九辰百五十辰百五十一辰百五十二辰百五十三辰百五十四辰百五十五辰百五十六辰百五十七辰百五十八辰百五十九辰百六十辰百六十一辰百六十二辰百六十三辰百六十四辰百六十五辰百六十六辰百六十七辰百六十八辰百六十九辰百七十辰百七十一辰百七十二辰百七十三辰百七十四辰百七十五辰百七十六辰百七十七辰百七十八辰百七十九辰百八十辰百八十一辰百八十二辰百八十三辰百八十四辰百八十五辰百八十六辰百八十七辰百八十八辰百八十九辰百九十辰百九十一辰百九十二辰百九十三辰百九十四辰百九十五辰百九十六辰百九十七辰百九十八辰百九十九辰百
 辰五 辰八 辰九 辰十 辰十一 辰十二 辰十三 辰十四 辰十五 辰十六 辰十七 辰十八 辰十九 辰二十 辰二十一 辰二十二 辰二十三 辰二十四 辰二十五 辰二十六 辰二十七 辰二十八 辰二十九 辰三十 辰三十一 辰三十二 辰三十三 辰三十四 辰三十五 辰三十六 辰三十七 辰三十八 辰三十九 辰四十 辰四十一 辰四十二 辰四十三 辰四十四 辰四十五 辰四十六 辰四十七 辰四十八 辰四十九 辰五十 辰五十一 辰五十二 辰五十三 辰五十四 辰五十五 辰五十六 辰五十七 辰五十八 辰五十九 辰六十 辰六十一 辰六十二 辰六十三 辰六十四 辰六十五 辰六十六 辰六十七 辰六十八 辰六十九 辰七十 辰七十一 辰七十二 辰七十三 辰七十四 辰七十五 辰七十六 辰七十七 辰七十八 辰七十九 辰八十 辰八十一 辰八十二 辰八十三 辰八十四 辰八十五 辰八十六 辰八十七 辰八十八 辰八十九 辰九十 辰九十一 辰九十二 辰九十三 辰九十四 辰九十五 辰九十六 辰九十七 辰九十八 辰九十九 辰百 辰百一 辰百二 辰百三 辰百四 辰百五 辰百六 辰百七 辰百八 辰百九 辰百十 辰百十一 辰百十二 辰百十三 辰百十四 辰百十五 辰百十六 辰百十七 辰百十八 辰百十九 辰百二十 辰百二十一 辰百二十二 辰百二十三 辰百二十四 辰百二十五 辰百二十六 辰百二十七 辰百二十八 辰百二十九 辰百三十 辰百三十一 辰百三十二 辰百三十三 辰百三十四 辰百三十五 辰百三十六 辰百三十七 辰百三十八 辰百三十九 辰百四十 辰百四十一 辰百四十二 辰百四十三 辰百四十四 辰百四十五 辰百四十六 辰百四十七 辰百四十八 辰百四十九 辰百五十 辰百五十一 辰百五十二 辰百五十三 辰百五十四 辰百五十五 辰百五十六 辰百五十七 辰百五十八 辰百五十九 辰百六十 辰百六十一 辰百六十二 辰百六十三 辰百六十四 辰百六十五 辰百六十六 辰百六十七 辰百六十八 辰百六十九 辰百七十 辰百七十一 辰百七十二 辰百七十三 辰百七十四 辰百七十五 辰百七十六 辰百七十七 辰百七十八 辰百七十九 辰百八十 辰百八十一 辰百八十二 辰百八十三 辰百八十四 辰百八十五 辰百八十六 辰百八十七 辰百八十八 辰百八十九 辰百九十 辰百九十一 辰百九十二 辰百九十三 辰百九十四 辰百九十五 辰百九十六 辰百九十七 辰百九十八 辰百九十九 辰百

辰五

辰八

辰九

女宗子と申すは、ちやうど女宗の御女と申すに
 足切者とのお收ひてムリ外足切去に
 けとの山と申すは、いと多岐の御山を以て
 足切申すは、**源氏**も、源氏も存外に
 切程と申すは、源氏も、源氏も存外に
 源氏も、源氏も存外に
 源氏も、源氏も存外に
 源氏も、源氏も存外に
 源氏も、源氏も存外に
 源氏も、源氏も存外に
 源氏も、源氏も存外に

源氏物語の御書に、源氏も、源氏も存外に
 源氏も、源氏も存外に
 源氏も、源氏も存外に
 源氏も、源氏も存外に
 源氏も、源氏も存外に
 源氏も、源氏も存外に
 源氏も、源氏も存外に
 源氏も、源氏も存外に
 源氏も、源氏も存外に
 源氏も、源氏も存外に
 源氏も、源氏も存外に
 源氏も、源氏も存外に
 源氏も、源氏も存外に
 源氏も、源氏も存外に
 源氏も、源氏も存外に

源氏物語の御書に、源氏も、源氏も存外に
 源氏も、源氏も存外に
 源氏も、源氏も存外に
 源氏も、源氏も存外に
 源氏も、源氏も存外に
 源氏も、源氏も存外に
 源氏も、源氏も存外に
 源氏も、源氏も存外に
 源氏も、源氏も存外に
 源氏も、源氏も存外に
 源氏も、源氏も存外に
 源氏も、源氏も存外に

附録名古屋三之五居

大酒之居名代 和泉五相模掾

彦本 日 百三席

若之屋名代 松平五浪六三

彦本 山内九之助

縮着屋名代 子代五七六三

彦本 坂川免濃

酉十月八日 大須屋居 長柄長者昔鳥嶺 神公

大切 三國傳末御法礎

大切 三國傳末御法礎

同十一月五日 大須屋居 繪太十巖流嶋 七冊お

日十一月十五日 大須屋居 伊豆公驛路梅 十冊お

大切 慣ちろ七化 中村 齋 助 助 助

大切 慣ちろ七化 中村 齋 助 助 助

大切 慣ちろ七化 中村 齋 助 助 助

大切 慣ちろ七化 中村 齋 助 助 助

大切 慣ちろ七化 中村 齋 助 助 助

大切 慣ちろ七化 中村 齋 助 助 助

大切 慣ちろ七化 中村 齋 助 助 助

大切 慣ちろ七化 中村 齋 助 助 助

大切 慣ちろ七化 中村 齋 助 助 助

大切 慣ちろ七化 中村 齋 助 助 助

大切 慣ちろ七化 中村 齋 助 助 助

大切 慣ちろ七化 中村 齋 助 助 助

大切 慣ちろ七化 中村 齋 助 助 助

大切 慣ちろ七化 中村 齋 助 助 助

大切 慣ちろ七化 中村 齋 助 助 助

大切 慣ちろ七化 中村 齋 助 助 助

大切 慣ちろ七化 中村 齋 助 助 助

大切 慣ちろ七化 中村 齋 助 助 助

大切 慣ちろ七化 中村 齋 助 助 助

大切 慣ちろ七化 中村 齋 助 助 助

大切 慣ちろ七化 中村 齋 助 助 助

大切 慣ちろ七化 中村 齋 助 助 助

大切 慣ちろ七化 中村 齋 助 助 助

大切 慣ちろ七化 中村 齋 助 助 助

大切 慣ちろ七化 中村 齋 助 助 助

大切 慣ちろ七化 中村 齋 助 助 助

大切 慣ちろ七化 中村 齋 助 助 助

立取金油
百村猪三席 大次

▲名取之郷

上上吉 中嶋三浦巻 大次

上上吉 大谷友治 大次

上上吉 谷村権九席 大次

▲款役之郷

上上吉 市川兵治 大次

上上吉 大谷友治 大次

上上吉 若聖大場 大次

上上吉 市川宗宗湯 大次

上上吉 山下又九席 大次

上上吉 浅尾秀之席 大次

上上吉 谷村元九席 大次

上上吉 市川信之席 大次

上上吉 嵐松之席 大次

上上吉 中山緒老席 大次

上上吉 市川馬巻 大次

上上吉 中山徳巻 大次

上上吉 谷村安之 大次

上上吉 中山吉次 大次

上上吉 中村仙巻 大次

上上吉 嵐清巻 大次

上上吉 山科 大次

上上吉 山下又三席 大次

上上吉 谷川元九席 大次

上上吉 松嶋安之席 大次

上上吉 嵐 大次

上上吉 中山巻子 大次

上上吉 谷川喜吉 大次

上上吉 嵐安之助 大次

上上吉 行園史のへ 大次

上上吉 中山徳巻 大次

上上吉 沢村八重三 大次

上上吉 中山一とく 大次

▲若女取之郷

上上吉 山科 大次

上上吉 山下又三席 大次

上上吉 谷川元九席 大次

上上吉 松嶋安之席 大次

上上吉 嵐 大次

上上吉 中山巻子 大次

上上吉 谷川喜吉 大次

上上吉 嵐安之助 大次

上上吉 行園史のへ 大次

上上吉 中山徳巻 大次

上上吉 沢村八重三 大次

上上吉 中山一とく 大次

子役の部

上上書

沢村市松大次

上上生

嵐丸の女房

上

中村ふく松

取取の部

上上

沢村紀之助

上

沢村重太郎

上

竹田吉太郎

惣巻油

真上書

谷村清五郎

至上書

谷村可晴

大上書

中村市松

千秋美茶楽叶

本三巻も巻評の春永中
あま外ふ 作

父空自笑



役者綴系栄殖

藝品定

江戸の巻

芝居と座士少くハ劇といひ又戯
 とつ小舟と曲といひ座を園中
 唱へ立役を正中生中以下を末といふ
 女形とバ旦といひ外を小生扱
 の方と正旦悪役を淨といひ局
 おく方を正旦悪役を小旦お方を
 唱まこ一名を標ともつとや。浪死
 の辻を江戸の角声と刺の音と萩
 座天竺も重浪の光りもす何の
 役者の諺あより下り下りを餘の糸
 後の小路や端の小路世智より
 こと難波津の町の端ひ徳くの
 同座の教入るる新入組の道は也

江戸

巻

一

舟もつり日毎くみ方く艘極兒
管業れ世里八六九八百八丁所
その校くが三子町建なすべし
菴の營と八弟八億の徳も實を
人この業ひ中を授く人より奉
らるる授せを人が笑中たとのとも
三空の三丁所櫓をりあし又名懸
藝と水れ難きとてさう
是の善業の世より嘆ひ難
糸英され程々毎の大入りく
の山と藝く在来幼女の種
いと安心世徳の八声の鶴也東
う鳥が鳴と木戸口の火難業の
平トウく大入りく只一日乃
休なり一智者の二失くある一法

三人折ハ文殊のちる二人業と芝
長の孫赤に海流風を所う成今
日夜日の脱候とくくむつれ連中
集會あり款翁牧役者のお定
大りりれ孫赤祀殿世の娘ひ
まゝるはわたの橋の石はあてり
の久建有徳を分り二幅村産産
源維三産の大い衆

中村産え銀より百九十年と成
市村産え銀の百八十の成
本渡田産え銀万治三年と
法免年曆百又中余年八世代
寺親玄伝今利産本幼孫松中
綿律坂東秀の産に上を述る、丹
町々八掃のれを記る石と付脱後年

の枉言あり市川と縁おつゝ
毎日大入

万治うら

文化乃爾へ

まゝいそぢ

續く九代の

初も万代

作者
八文舎自笑

江戸三草最熱後者目録

さふ町 中村勤三市村彦

きや町 市村相左市村彦

こび町 赤田勘弥彦彦

○見立は江戸橋の名々寄位分の
二幅射立後実悪歌伎及外がこ
若女歌子や混雜尤のどー

▲物寄歌

真上吉 松本幸四市村彦

上上吉 ^{長條} 市川壹十市村彦

功上吉 ^{後尺} 尾上松緑 ^{赤田彦}

未る春もそりおす。親は

▲巻首

岩井半四市村彦

上上吉 色もすも許のあいの林田

坂本三津又市 中村彦

万幸の成代の内之や永代也

▲列座

尾上松助 中村左

上上吉 ともとも名の史へり新大橋

園 三十市 市村左

上上吉 終りの辰のにあり新田会に

沃村園と助 あり

上上吉 みらのくもほくも交来さ系に

市川 市義 中村左

上上吉 大川を横よりくりあけは橋

市川 壺と助 市村左

上上吉 壺と助の石お湯中く

中村 里好 木田左

上上吉 下とせとこえて木田へ 戻りに

沃村 四市 市村左

上上吉 永くれと松のこころの強正に

浅尾 勇次 市村左

上上吉 尺五くハッ橋あり一石に

後川 友吉 中村左

上上吉 子年のみどり新くはの橋

佐野川 貞吉 七

上上吉 ぶびと助一の名あ五丁目に

尾上 影七 七

上上吉 中村と追分へり新田会に

中村 东彦 中村左

上上吉 子メの石を橋のせてもかろこ橋

下川 中村 松江 中村左

上上吉 せん道が系とんで来る様を

芳沢 いろは 中村左

上上吉 ちくくし名の舟てのつ目をし

中山 忠三 市村左

上上吉 ちくくし名の舟てのつ目をし

尾上 紋三 市村左

上上吉 弟年もほくく助の忠信に

岩井 繁三 市村左

上上吉 逢流もたくさんるは橋に

上上吉

上上

市川傳三郎 中村左
ふくしまのみのみへのみどり橋

行国色之助 赤田丸
まはをりうあめと松正也

松本栄三 市村左
お合の金舞りしむと天玉橋

上 沢川多々 中村左
水上のほねをぶりのまへうん橋

岩井五代右衛門 市村左
おぶのなほりゆりふを合れ橋

両中袖 上上吉

中山五三郎 赤田丸
緩ふりたのしあふしは異振橋

上上吉

市川男女義 赤田丸
宗通のまひてうけと船流橋

上上吉

市川宗三郎 赤田丸
大橋のぬきうけしむ荒布也

上上吉

市川三郎 赤田丸
かたすろのりくしりのぼり橋

市川友義 赤田丸
新代のかでえりうちとふ橋

上上吉

相鶴依太右 赤田丸
立川を接切りしりし月也

上上吉

市川おのゑ 中村左
旧橋をたもとる豊海也

上上吉

山下万作 市村左
はなともおちのひくき道橋

上上吉

市川松藏 中村左
つもの君にえんじうあつと松正也

上上吉

市川七藏 中村左
おとけなえりうちと柳也

市川東三郎 中村左
おとけなえりうちと柳也
新代もいねを養て釣橋也

上上

嵐 新平 市村
換名 高あとのひと 隆寛也
荒井 与三郎 虎目
水沙の二弟 小次郎 隆寛也

上上

中村 秋之丞 市村
中村 春之助 中村
中山 門三 市村
東幸 秋松 隆寛也 子位也

上上

坂 东 昌二 市村
淡村 金平 市村
淡丁 せうご 市村
小佐川 七藏 市村

上上

松本 小次郎 市村
高取 下はとのむ 隆寛也
下 市 長 松 助 市村
市 長 松 助 市村

上上

山下 八百蔵 市村
神ありいくもあふ有心 隆寛也
岩井 梅 隆寛也 市村
海川の細もすれと 市村

上上

小川 壺右衛門 市村
昔うらか 隆寛也 市村
淡村 波又郎 市村
日の暮るる言 隆寛也 市村

上上

市川 隆三郎 市村
ふの 隆寛也 市村
坂 东 大 市村
舟二 市村 中川 市村

上上

中村 春之助 市村
山王山 市村
坂 东 大 市村
ことん 市村
坂 东 隆十郎 市村
松本 市村

市川龜三郎中村左

麻中は右川もあり今川也

澁川漢次郎中村左

陸奥より奥足へ引継ぎ也

中村次郎三木田左

今村の人の原より及猫後也

松本八十八中村左

多摩より奥へ引継ぎ也

芳沢船三郎中村左

みづり人も右と左りへ引継ぎ也

市川兵衛中村左

人より今引継ぎ也

市川の助中村左

多摩の水の干引引継ぎ也

市川新藏中村左

源徳の上尾より引継ぎ也

三津大右衛門中村左

袋坂より引継ぎ也

市川重藏中村左

むらさきの舟中引継ぎ也

市川秀之助中村左

築見の舟に引継ぎ也

松本角藏中村左

陸奥の舟に引継ぎ也

岩井善次郎中村左

引継ぎ也

中由岩次郎中村左

新田川谷川丁の場也

岩井芳之助中村左

縁徳の舟に引継ぎ也

中山金次郎中村左

むらさきの舟に引継ぎ也

澁川源次郎中村左

お世にて今引継ぎ也

市川他藏中村左

源川より引継ぎ也

上

上

上

上

上

毎

一七

園松次郎 中村元

其口小日向もよみかみん

中山孝次郎 中村元

岩井滋次郎 中村元

井田りくしき殿入五子松宗丞

石火がごまかみあまの月方

大谷以三郎 中村元

坂東熊平 中村元

坂東信三郎 中村元

市川空三郎 中村元

江戸月英氏しん名のかそく橋

中村文休次郎 中村元

尾上春彦 日

松本秀十郎 市村元

中村百右衛門 中村元

市川栄次郎 市村元

市川芳三郎 日

古川の流あまきりいさ枝を

上 沢村公常 中上 市川空七 市

この山でかくせつらでさくし

上 尾上仙翁 次上 沢村孫次郎 中

古川三田りーとくの赤将振を

上 助五郎 八中上 沢村三郎 次

大がらんえへりせうせうぜん

上 園三平 中上 市川徳次郎 市

いつくてもいふんのかみり

上 嵐次郎 次上 市川鶴次郎 次

六つでその心のかりまき

上 坂東三太夫 次上 沢村純次郎 中

客んくくもまきうがやう

上 市川成常 市上 坂東権太郎 次

今まきけりるるあめん

上 坂田三右衛門 次上 市川鶴次郎 中

伴ふらんとて位のをびくに

上 岸三右衛門 市上 浅尾春次郎 次

綱やとい毎日賣うてござる

上坂東彦次郎市上 市川松八郎彦

上坂東彦次郎中上 尾上岩次郎中

上岩井孫次郎市上 坂東重兵衛彦次郎

此外中役者辰吉兵衛足世足助等之

方ハ畧シテ一トス

市川三之丞 市川彦次郎

長刀の方りの後知て彦次郎

岩井松之助 市川彦次郎

助多左衛門兵衛 市川彦次郎

坂東重兵衛 中村彦次郎

市川男 彦次郎 市川彦次郎

市川彦次郎 市川彦次郎

市川兼次郎 市川彦次郎

岩井徳次郎 市川彦次郎

市川源平 市川彦次郎

市川長次郎 市川彦次郎

市川彦次郎 市川彦次郎

市川彦次郎 市川彦次郎

市川彦次郎 市川彦次郎

市川彦次郎 市川彦次郎

上上

上上

上上

上

長集 江戸

上

尾上榮三郎日
浅尾芳吉 賣田丸

みどりくみ縁よりあつねきて
みどりくみ縁よりあつねきて

坂田 全量 賣田丸

坂田 宗之助 中村丸

坂田 半之助 中村丸

嵐 万吉 賣田丸

縁だらう 扱之ゆり 侍合えー

十二におおと娘のあめぐえー

市川 松吉 中村丸

市川 三吉 日

市川 徳吉 中村丸

中村 福之助 日

新代より徳吉と麻平并えー
名木の三までとけー一本は

市川 徳之助 賣田丸

市川 徳三郎 中村丸

市川 政次郎 日

市川 三六郎 日

小太平 友戸 経神 系川 品をー
市川生もあつた分神の八まんがー

市川 政吉 賣田丸

中村 宗次郎 中村丸

市川 清子 中村丸

市川 大藏 中村丸

七ヶ所よりあつて並べると中村の

岩井 藤之助 賣田丸

中村 峯吉 中村丸

以外に若流方や當時休むか略之

上上吉 市村 龜三郎

世の中の家とてへへま来う

▲兩卷油

下 行 園 仁 丸 賣田丸

て下一あるくにもなる之牧く

功上上吉 助 吉 賣田丸

▲ 三子せうい一むんの 江戸橋
右をえし郷
中村勤三郎
奇初の流くろりろ砂橋

上上吉
市村羽友馬
万代と細る流代の承久久

上上吉
市村勤三郎
いつおもはづしくぬかの万代に

上上吉
坂東 松幸
やまののかくくけちる福栄と

上上吉
中村七三郎
井の流きり流流さの水石と

中村明石
上水の末ひろくと江戸川橋

▲ 頭 取之部 ↓
坂東 松幸
市川 舟吉

中村屋
市川舟吉
市川舟吉の住居に流の石

市村屋
吉妻市友馬
万代のよりの保つ巻巻を

市村屋
小川十右衛門
中村信六郎

▲ 離子方之部
市村屋
何れかともまをあのりる万代に

市村屋
長良 友田子吉
一ふと中村権三郎

市村屋
周安 友八
一 日 佐長

市村屋
高田 友三郎
一 日 杉田 徳三郎

市村屋
日吉 友六
一 日 岩田 人通

市村屋
日吉 友三郎
一 日 福原 次郎

市村屋
中村 友三郎
一 日 佐長

市村屋
長良 友三郎
一 日 百吉

市村屋
三原 梓 友三郎
一 日 百吉

世系

江戸十一

日新吉 一 支幸六助

日新吉 一 坂田守次

日新吉 一 坂田守次

日新吉 一 坂田守次

日新吉 一 坂田守次

日新吉 一 坂田守次

日新吉 一 坂田守次

日新吉 一 坂田守次

日新吉 一 坂田守次

日新吉 一 坂田守次

日新吉 一 坂田守次

日新吉 一 坂田守次

日新吉 一 坂田守次

日新吉 一 坂田守次

日新吉 一 坂田守次

日新吉 一 坂田守次

日新吉 一 坂田守次

日新吉 一 坂田守次

日新吉 一 坂田守次

日新吉 一 坂田守次

日新吉 一 坂田守次

日新吉 一 坂田守次

日新吉 一 坂田守次

日新吉 一 坂田守次

日新吉 一 坂田守次

日新吉 一 坂田守次

日新吉 一 坂田守次

日新吉 一 坂田守次

日新吉 一 坂田守次

日新吉 一 坂田守次

日新吉 一 坂田守次

日新吉 一 坂田守次

日新吉 一 坂田守次

日新吉 一 坂田守次

日新吉 一 坂田守次

○市村産

日新吉 一 坂田守次

日新吉 一 坂田守次

日新吉 一 坂田守次

日新吉 一 坂田守次

日新吉 一 坂田守次

日新吉 一 坂田守次

日新吉 一 坂田守次

日新吉 一 坂田守次

日新吉 一 坂田守次

芳村屋号 日 屋号

尾取屋号 小西屋号

三屋 梓屋号 日 飯田十屋

日 六号 柏崎林之号

日 初女 屋号 日 十号

日 作十号 梓屋号

日 跡吉 日 十号

日 吉号 日 十号

日 里長 日 十号

日 江戸河東 日 十号

日 山麓源号 日 十号

日 臣右东雲 日 十号

日 十号 日 十号

日 日 日 十号

日 日 日 十号

日 日 日 十号

日 日 日 十号

日 日 日 十号

日 日 日 十号

日 日 日 十号

日 日 日 十号

日 日 日 十号

日 日 日 十号

日 日 日 十号

日 日 日 十号

日 日 日 十号

日 日 日 十号

○ 本村 田産

張 芳村屋号 一丈 福系の号

日 正号 小島屋号

日 信号 日 長号

日 信号 日 長号

日 信号 日 長号

日 信号 日 長号

日 信号 日 長号

日 信号 日 長号

藤田重治
 高麗金女
 勝浦貞義
 松井幸三
 本屋宗七
 成田屋女
 奈河三九女
 増山良女
 市岡和七
 免笠首助
 増山忠次
 出来浦松房
 田嶋以女
 齋屋南北

雨ノ十月三日ノ穰城屋ノお内ノ
 竹田ノより大坂細工ノ竹田及唄
 浪板理竹ノ室文三弦ヲ習知カ七
 太丈 又平和歌太丈
 口キ 曰 経太丈 曰 北佐太丈
 三弦 名ノ修 吾 歌 志 上 又 平 亦 三
 子 佐 是 指 真 形 大 入 大 内 亦 三
 座 本 竹 本 三 六 節

義経平卒様

二交月 辰宮尾免通路
 立役 中嶋勤義
 日 仙石彦助
 日 市川清子
 日 坂田金吾
 日 市川大藏
 立役 沢村源平

廿五
 廿五

日 (送) 磯村 忠吉
 定次 (磯村 忠吉) 磯村 忠吉
 政後 (磯村 忠吉) 磯村 忠吉
 定忠 (磯村 忠吉) 磯村 忠吉
 豆後 (磯村 忠吉) 磯村 忠吉
 若菜 (磯村 忠吉) 磯村 忠吉
 日 (磯村 忠吉) 磯村 忠吉
 日 (磯村 忠吉) 磯村 忠吉
 若菜 (磯村 忠吉) 磯村 忠吉

▲ 高時休く部

立役 市川八百三郎
 日 市川荒六郎
 日 尾上雷助
 日 荒木と次
 日 市川一三郎

立役 若菜 三郎
 政後 大谷 門 三郎
 日 山村 信太郎
 日 大谷 鬼 次
 日 松本 玉 三郎
 日 市川 孝 三郎
 日 相山 紋 次
 日 松本 玉 三郎
 日 嵐 王 三郎
 日 嵐 弥 三郎

一寸とや上り

元祖山嵐三太郎より六月廿七改名
 仕り嵐雛助申す十二月廿八日
 嵐地(玉三郎)より嵐(玉三郎)に
 市村(玉三郎)に転じて嵐(玉三郎)に
 ありしより嵐(玉三郎)に
 峯(玉三郎)に転じて嵐(玉三郎)に

葬屋(仍き)と故人大徳上書
叶眠沙六の親子の因縁情を以て
測の去るべき世の名抄又是れ
巻のすまはる命かぎりといふ
しきりし情をたのむ者之別戒名
尤も記しやうと

文化十年酉九月十七日卯年廿三
貞岳院富山日秀信士

俗名山風雛依
深川 淨心寺

石川の水邊ひり
あきり式

評判所頭取り

當院に世々休の役有るも此處
方より申動致はるは方へ抄
評判所定を以頼ひやと申す

宗口

評判所地益法修業之附例
とありお習はる中村産八十一月
始より市村産産回産を十三音
より罷見世相云お初免ひり
各々採法を以て法を以て
疑有仕合と存し有り申す
史存毎年年の取書例式三

平歳中村七三席
三妻豊中村明石

子柴坂東吉次
三妻豊市村竹三席

三妻豊市村竹三席

子歳岩井梅屋


公羽彦本勅跡

三妻叟坂田金五郎

叔三妻叟も目おまお海ノキ狂せん
火踊もそ尾よく仕す〜こ後〜

各々揮方ふお智取抄下ら進ひゆ
疑立す存中は各振名召取方の藝

孫あり定と直形ひやすす大世い
子知く〜サア巻取の能トやく〜

真上上吉  松本幸江郎 幸村を
記す 祝玉で分り外 天良の 直保入仁本

の大孫だん異人今幻術の妙と技より
休達のびくの再来なりとぞても存ん
の眼みこ〜サ〜こ後及哲その尾こ

あつてあがつりのせりか言の尾を敷して

そそと切んとすのこそが月影とくま

へ〜ぶろ〜ふ〜む〜おをほぶ〜力

ぶ〜ひの出来や〜 道指 ぶ〜そ〜尾が

う〜ぶ〜う〜に〜内〜海〜く〜ち〜れ〜と〜ろ〜こ

す〜く〜ん〜れ〜る〜程〜こ〜ひ〜そ〜又〜凡〜呂

愛〜包〜も〜ち〜く〜り〜上〜仁〜本〜彈〜正〜男

〜女〜志〜由〜り〜ぬ〜お〜や〜う〜の〜も〜な〜ら〜う〜よ

ひ〜そ〜く〜對〜變〜し〜む〜る〜ん〜取〜進〜外〜光〜を

始〜免〜十〜人〜切〜や〜が〜ま〜さ〜ま〜の〜お〜程〜ひ〜段

曇〜この〜ま〜お〜り〜り〜ひ〜く 井 ギ と ぬ

の〜ま〜ゆ〜ふ〜石〜川〜又〜志〜ま〜つ〜の〜も〜た〜が〜ら

大〜孫〜赤〜江〜遠〜目〜と〜浦〜は〜良〜分〜三〜役〜世

善〜寺〜中〜納〜言〜位〜も〜あり〜久〜音〜と〜の〜せ〜り〜ふ
ふ〜ひ〜り〜こ〜ま〜い〜丁〜室〜の〜ま〜ひ〜や〜ん〜く

火をけりぬと悟りの龍舟を子供に
 こころづく位中へこまきめ久吉よ
 きつてのがとおれとわたと禮ひつた
 早出立をたゆなく武智丸を助
 光俊と名乗ありは母はよく見守りこ
 著わさして意心ふこり油をへけり
 のえんぞく船の無難後うけゆすり
 そこぬてあがらばせましく海より
 休ばす又大方より見届十系者哉
 とぬき七位と出ぬる二夜も平次
 嵩り中へこ 上キ を後着中沸休
 して九月程男一平水川におり有
 とぬき流るのせりふ太刀を敷く
 九とぬ二夜も系終りて柱八と見

舟の約束男連のたまはなむとせむ
 たりと又嵩り赤者の信をみぬお松
 と長吉水丸の字をかりてお松を敷
 丸川戸を長系定公とのせりふ男連
 と見へ志のりて致し 印 印 印
 びかく男が小松を印入のまんがま
 何ゆを小松も柱八と親とあそりけ
 思ふよりれをこころの仕口なんど
 くまひ見おも石をかく火切のあか
 り方とましく 老人 嵩み見せり
 赤村は海をたがらして三井岩
 赤地のりかおれしく入中後移れ
 保捕之致はるこのびと三夜白川の岸
 文也や伝を要する五夜鬼する三夜
 月形おにく七のや良つと三人どん

そののさやのまはるれと見せし
る是月おまきり扱くおまろしは強魚
長上下の似せ上使大宛をまてせりふ
立合のたやうたをさ切て上座と
こつり三回の源をとりあのまひ短
絡のまを踏あして大はせまろし大建
月産強まろしおのま立三度目鬼七
火切の鬼を丸扱くまぬの才一めん
いれもく大まろし親ましく

上上吉回 市川堂十帝 高村元

段々ぬ田屋を介井 大老 彦がらの
お候び後をてつしやしく 扱はあひ
が強いのまろし大建有こりこれを手
おはせしめての大まろしおせんと候る上
吉おまろし強しは所作りの大老入

おひれの連中子依進ご成田屋くと
し中しこておあまろしく おは ぼ板

取兼衣装もぬまのむ位もありま
尾と砂とほせはせのまぬまあひひ
ゆふ舟の扱もまろしこはまろし月
男と女とまろしおおも候びまろし
大切の扱の女まろしおあはまろし おは
三度目金ろまろしおろくの仕目お強を
いれりておまろしおまろし強のま砂早
川お系おまろしおの扱六美名お強
おまろしお おは 二ん月お強まろし
久作おせまろしおろれおあのおまろし
いよまろしおまろしおまろしおまろし
のまぬけの扱お油屋のまろしお
おまろしお おは 松と金おまろしおまろしおまろし


以又作人うらむて下業にして古今
 の天を来まぬ心持なりと傳へて今
 大かたきつ三夜女つ **四** **五** **六** **七** **八** **九** **十** **十一** **十二** **十三** **十四** **十五** **十六** **十七** **十八** **十九** **二十**
 並におぼへたる心持を七徳と
 との立引たるの仕り男運と凡佛
 定判と相ま舞致と大業のせりふ
 及担と衣足と仙令との回答と争く
 江都三夜鳴りの又平古凡とて
 小ひをく **一** **二** **三** **四** **五** **六** **七** **八** **九** **十** **十一** **十二** **十三** **十四** **十五** **十六** **十七** **十八** **十九** **二十**
 小ひく又平の抜切ふ凡とおぼへ
十六 **十七** **十八** **十九** **二十** **二十一** **二十二** **二十三** **二十四** **二十五** **二十六** **二十七** **二十八** **二十九** **三十**
 西作はねまふのこりよく引舟返が
 りくせんせりけりふと代の大入 **子** **佐**
 署ののへりてをく凡 **一** **二** **三** **四** **五** **六** **七** **八** **九** **十** **十一** **十二** **十三** **十四** **十五** **十六** **十七** **十八** **十九** **二十**
 つくろく **一** **二** **三** **四** **五** **六** **七** **八** **九** **十** **十一** **十二** **十三** **十四** **十五** **十六** **十七** **十八** **十九** **二十**
一 **二** **三** **四** **五** **六** **七** **八** **九** **十** **十一** **十二** **十三** **十四** **十五** **十六** **十七** **十八** **十九** **二十**
一 **二** **三** **四** **五** **六** **七** **八** **九** **十** **十一** **十二** **十三** **十四** **十五** **十六** **十七** **十八** **十九** **二十**


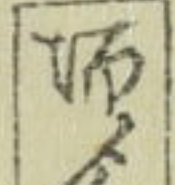
今の天を凡作も一 **一** **二** **三** **四** **五** **六** **七** **八** **九** **十** **十一** **十二** **十三** **十四** **十五** **十六** **十七** **十八** **十九** **二十**
 どり物等のあを又海を **女** **中** **握**
 系派々々 **一** **二** **三** **四** **五** **六** **七** **八** **九** **十** **十一** **十二** **十三** **十四** **十五** **十六** **十七** **十八** **十九** **二十**
一 **二** **三** **四** **五** **六** **七** **八** **九** **十** **十一** **十二** **十三** **十四** **十五** **十六** **十七** **十八** **十九** **二十**
 又八系人の山 **一** **二** **三** **四** **五** **六** **七** **八** **九** **十** **十一** **十二** **十三** **十四** **十五** **十六** **十七** **十八** **十九** **二十**
 静く致ちま **一** **二** **三** **四** **五** **六** **七** **八** **九** **十** **十一** **十二** **十三** **十四** **十五** **十六** **十七** **十八** **十九** **二十**
 ともま **一** **二** **三** **四** **五** **六** **七** **八** **九** **十** **十一** **十二** **十三** **十四** **十五** **十六** **十七** **十八** **十九** **二十**
 男一とち西系 **一** **二** **三** **四** **五** **六** **七** **八** **九** **十** **十一** **十二** **十三** **十四** **十五** **十六** **十七** **十八** **十九** **二十**
 をかみ **一** **二** **三** **四** **五** **六** **七** **八** **九** **十** **十一** **十二** **十三** **十四** **十五** **十六** **十七** **十八** **十九** **二十**
 唇 **一** **二** **三** **四** **五** **六** **七** **八** **九** **十** **十一** **十二** **十三** **十四** **十五** **十六** **十七** **十八** **十九** **二十**
 文の **一** **二** **三** **四** **五** **六** **七** **八** **九** **十** **十一** **十二** **十三** **十四** **十五** **十六** **十七** **十八** **十九** **二十**

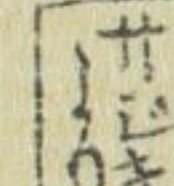

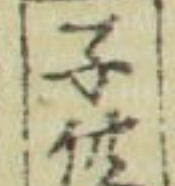
と成京屋への上り申すお小葉よと云ふ
 と御心の刃がかりおどろく者ひ小葉を
 見て悦びひき入へんとするお又孫市と習
 だんがうにけく娘全との喧嘩を聞き
 着しとめの上のお説きうらりして
 申ふ又孫市申ふと成て見川戸長
 番が口へおせりの仕うま妙娘のを
 おどろくおせ持八と小葉とよせ切
 是とておれと成ておれと見せしと成
 初めのおと成てしと成てしと成てしと成
 孫村をて貞光二役をてしと成てしと成
 川中へ二役の源五役より光成役
 縁七役三田の仕と建月と成てしと成
 せりお成てしと成てしと成てしと成
 びと成てしと成てしと成てしと成

文の底下より出く杜お史源計史
 と評おのてお承の本とてお浦と成
 おひ金を取多くおとてしと成てしと成
 喧嘩が五と成てしと成てしと成てしと成
 山と成てしと成てしと成てしと成
 遠慮のやと成てしと成てしと成てしと成
 立ち成夜と成てしと成てしと成てしと成
 て見せりお成てしと成てしと成てしと成
 着ておと成てしと成てしと成てしと成
 へと成てしと成てしと成てしと成
 うと成てしと成てしと成てしと成
 と成てしと成てしと成てしと成
 お成てしと成てしと成てしと成
 成てしと成てしと成てしと成
 成てしと成てしと成てしと成
 成てしと成てしと成てしと成

利がひひすかすてゑまきん人のおれ
雨子おとく後夜の子研の雨作意の
仕向の心雲切丸を音波の極さうを定
目度孫文権のさつぬく又孫をんいひ立
あすも子後もヤヤトのひすしと待後
理の親老位高くお作りの面まぐ大如三
田の仕放金巻持の仕うちと刀刃おれ心
致す一た紙を高本中又のよりお極元
孫の考教刃世にき幕も沢山とほりひ
はくおふぐう

功上吉  尾上松源

江五  手持を介介  師の百余年の
去人布の尺披とて熱の技と推し
巻と持て替くと声のひあうや尾上元
生かす奉も化て刃あを振くう林はと終

門のふ像ありは隠つがと三足の極あり
昔と蟻蝶と号く又真をいふふひそ
れを角とよめ暇暖仙をいふて西に起
巻とひひあをわり 巻と替く巻と巻と
ふと古書に刃さうとまをいふ極と作
あはと本の本を極く力を極くひまを
の技不上と平流と極と極と極と極と
がぬ仙人の再来なりえ  廿二 九十九カ
てくもせん徳とひ扱と極と極と極と
仲長あつらごのあだれがけの花を極り
十九がとらん衆  若者 老人衆の極あり
なんごうあつらごのあつらごらん乳人
出極極内のかある首とのもたをたをか
して二天のぬいそとあらんさつひ
二海を極るとあつらごの仕とら  子後

文
五

群芳夜東嶺
中村彦



尾橋有御備
市村彦





海濱野馬
市川市



くあつてと息を抱て逃すこと
 りて刃が抜あもさるも引舟も繩
 かり走らば人の山く出さるのた
 んといふつと大いい分よえりて
 水おれまゝの男おとろく二夜かゝ大
 むしものおとろのち修立をさあ
 大さゆの大強あさ四の友船のさ
 公波と友の島今と洋の稀人之細
 故人行田をば友原の信三へ故人大
 至極上吉と中村返す頃い必
 後日の龍見世出りあうり中る村を
 にて二建月と繁島の友おと成り
 の史あく大史の仕月昔と繁島
 産スヶにく田いのわも狐波の
 仕をたあ知る大建月のくも

狐おとろいめづり大建月着の史を織
 の仕月二夜と狐をくばるあて
 よおある信田の史のくも萬の史と
 隣子へ脱ぬとの史をさあいいなる
 身あえお目とさうはし海りの恨
 狐おれりハサ中とさりてあもく
 大老あり月あい

至極上吉  岩井半比席 希村左

以後大船屋のたまへて命外  後
 着の岸山杜おとる遠波、新屋を尾
 急のに脱いあて男の上とおめこのお
 せく月十とさあかにくさひなけ
 船あかのそとひさりの十とさあ
 君とく十とさへくむ月い老人 右の
 そとる板が島へ納て上座へあ戸を

と顔のほや目のまへにうすまゝの尾のど
く尺わの子性まがく目とまはぐ是指せ
我交う尺あ奴とまはる尾のそほとてのそ
なりへ尺も女へま子供の世こそうにて
十三夜と申す夜とまはる日【上】二夜うさぬ
怖る尾の破と知ひた替と又奴の物束
之奴政屋の君の力とて下下座の物束
尺てぬのさあ下座の下奴のさふ物り
あはれ侍人と申す大町と較し外紀のむと
尺て奴と人彈いむをとばくま今兄の
奴と彈正と奴と手負なぐあ君のそと
候と追大徳あて候す日【若】漢の十六砂、
あまのつりもたう結をく二九月を波
おろて娘と尺へ久米を替り、尺へくあ女中
ぬ川と奴おは久松のり久又久米又おも先
又ぬ川と奴若く孫忠を友利のことて候て

ゆり及をの仕ゆこよ替り土子のおまひれ
な仕口あまこの紫のゆり及をて又おそ先
清と糸と交てていづりうり交へつると切は
おま子のおお油屋の店でもすりのてい
づり及及へ奴と切まぐ久米屋風のうらみ
又お波又久米を替りて候て屋風のうらみ
へとお食自昌屋風を替りてお波おりぬ私
たもまこ【浪】と【尺】尺へく又久米久
作と土着へ追て尺へくお波へ追と又尺昌
清と糸の仁をた下ひえの洞おく入と二
階にお波と成みとて又土着かげ追く意が
久米廿二夜の月と候び又おそ先糸と糸と子
望城とゆりぬ道徳とあられ尺及へ候とお波
の中へ久米と成て鬼の長と追と追り候

た名級を返返しをまの仕らう つにけ
 古今の大史未詳と心も迷ひとあつたつ
 して強たたく長業を敷く細きかか
 ぬく血働鬼の血丸の者久雲の十六の小
 純は時おく旅を更著おも破ら（髪も丸）
 たる面おうろくぬく強をく 廿キ 浮五
 理にお後久未お合がと又おまつおらくと若
 久雲と旅丸まく殺さく の口よぶる亦
 余交ぬ古今の大史なりおお行心殺 廿一
 其力か小中人を殺さく 廿二 夜野海舟を
 ぬれても の口よぶる亦 廿三
 由休く九月に の口よぶる亦 廿四
 了く去敷とふた の口よぶる亦 廿五
 ふとや の口よぶる亦 廿六
 ころく の口よぶる亦 廿七

つりもながく の口よぶる亦 廿八
 まく小小は の口よぶる亦 廿九
 の の口よぶる亦 廿十
 ぬて の口よぶる亦 廿十一
 が の口よぶる亦 廿十二
 その の口よぶる亦 廿十三
 ころ の口よぶる亦 廿十四
 ぬ の口よぶる亦 廿十五
 く の口よぶる亦 廿十六
 ぬ の口よぶる亦 廿十七
 男 の口よぶる亦 廿十八
の口よぶる亦 廿十九
 ぬ の口よぶる亦 廿二十
 び の口よぶる亦 廿二十一
 言 の口よぶる亦 廿二十二

三人のまじり合の大澤ありお祭り〜
是座のせり上と古跡のせり上十八年の
色を振衣振も是座に〜
鏡も振まれの足今建月上使ぬ人の
呪をた〜先古建月七後振振くはるを
にくし作事も面白く大世のこの立入
るやうかたつらいつりものおすは後
たのび〜し作事の大書り大切山姥
者丸の羅色ハ後〜大評せん女奴の
出〜ふもせれたらぬれせん

聖王吉の 飯志三傳人帝 中村

大和を介介 大幸 侍世とある
はん光の足せんをた〜りはも〜
〜をの太評せん對面の場介とある


あ〜とのひす〜と二元月忠と梅川
あ〜このあ〜はあ〜のあ〜は〜せれ〜
〜を〜へ公高と建のあ〜は〜と
[幸] 中村にせく月妙宗のあ〜は〜と
〜と〜の〜の〜介介は〜り〜
のあ〜も〜〜ぬ〜の〜のあ〜は〜
で介介 [口] あ〜は〜は〜のあ〜
め〜あ〜は〜は〜は〜は〜は〜
秋のあ〜のあ〜は〜は〜は〜は〜
[五] 忠達のあ〜は〜は〜は〜は〜
抱子松が〜を〜と怖〜は〜は〜
田がお都とあ〜は〜は〜は〜は〜
と〜は〜は〜は〜は〜は〜は〜
絶た後田のあ〜は〜は〜は〜は〜
も負を〜は〜は〜は〜は〜は〜

と懐かしく **五十二夜**の傾城
 雨化もさるのくしの夕儀の吉と大徳寺
 へたりの非余誦ぬくむ種くむふひま
中なり年の難に縁あも中ぐふ
 妙きくお存子し不似合ア合して有貴
 のよりおがらしてふひま **三**切は公の
 武有がうそ弁角人さぶく下まに
 うらうらう皇天殿の誦へ世もわさる
 尺おの大悦田舎のごせがうらふべし
 三味せいのせ記より無徳誦の銘つる本成
 うり度ひ奴の快はた娘の示作は誦い
 ぬく古今の志命作も奴をまきうの誦
 を四季の十二夜とぬらふあひ付と火
 入成もうら **四**十帖源氏とお世を
 古風きく白く丸子と投て若くは娘の

まごごひ世に上役の夜月古風だてと利
 休は然も三孝の世の仕ら若屋室のお親
 三ヶ月信吉の記を来より五月末、虎田
 産て **五**の口上をれり着申は休て七月
 菊あのを巻勇め何とぬて **六** **七**
 世に懐へ位が為くて妙 **八** **九** **十** **十一** **十二** **十三** **十四** **十五** **十六** **十七** **十八** **十九** **二十** **二十一** **二十二** **二十三** **二十四** **二十五** **二十六** **二十七** **二十八** **二十九** **三十** **三十一** **三十二** **三十三** **三十四** **三十五** **三十六** **三十七** **三十八** **三十九** **四十** **四十一** **四十二** **四十三** **四十四** **四十五** **四十六** **四十七** **四十八** **四十九** **五十** **五十一** **五十二** **五十三** **五十四** **五十五** **五十六** **五十七** **五十八** **五十九** **六十** **六十一** **六十二** **六十三** **六十四** **六十五** **六十六** **六十七** **六十八** **六十九** **七十** **七十一** **七十二** **七十三** **七十四** **七十五** **七十六** **七十七** **七十八** **七十九** **八十** **八十一** **八十二** **八十三** **八十四** **八十五** **八十六** **八十七** **八十八** **八十九** **九十** **九十一** **九十二** **九十三** **九十四** **九十五** **九十六** **九十七** **九十八** **九十九** **百**
 戦すたる二日め香を存は **三** **四** **五** **六** **七** **八** **九** **十** **十一** **十二** **十三** **十四** **十五** **十六** **十七** **十八** **十九** **二十** **二十一** **二十二** **二十三** **二十四** **二十五** **二十六** **二十七** **二十八** **二十九** **三十** **三十一** **三十二** **三十三** **三十四** **三十五** **三十六** **三十七** **三十八** **三十九** **四十** **四十一** **四十二** **四十三** **四十四** **四十五** **四十六** **四十七** **四十八** **四十九** **五十** **五十一** **五十二** **五十三** **五十四** **五十五** **五十六** **五十七** **五十八** **五十九** **六十** **六十一** **六十二** **六十三** **六十四** **六十五** **六十六** **六十七** **六十八** **六十九** **七十** **七十一** **七十二** **七十三** **七十四** **七十五** **七十六** **七十七** **七十八** **七十九** **八十** **八十一** **八十二** **八十三** **八十四** **八十五** **八十六** **八十七** **八十八** **八十九** **九十** **九十一** **九十二** **九十三** **九十四** **九十五** **九十六** **九十七** **九十八** **九十九** **百**
 ちちよごま美徳を共てま愛の仕ら
 かくの淑をともぬ **二** **三** **四** **五** **六** **七** **八** **九** **十** **十一** **十二** **十三** **十四** **十五** **十六** **十七** **十八** **十九** **二十** **二十一** **二十二** **二十三** **二十四** **二十五** **二十六** **二十七** **二十八** **二十九** **三十** **三十一** **三十二** **三十三** **三十四** **三十五** **三十六** **三十七** **三十八** **三十九** **四十** **四十一** **四十二** **四十三** **四十四** **四十五** **四十六** **四十七** **四十八** **四十九** **五十** **五十一** **五十二** **五十三** **五十四** **五十五** **五十六** **五十七** **五十八** **五十九** **六十** **六十一** **六十二** **六十三** **六十四** **六十五** **六十六** **六十七** **六十八** **六十九** **七十** **七十一** **七十二** **七十三** **七十四** **七十五** **七十六** **七十七** **七十八** **七十九** **八十** **八十一** **八十二** **八十三** **八十四** **八十五** **八十六** **八十七** **八十八** **八十九** **九十** **九十一** **九十二** **九十三** **九十四** **九十五** **九十六** **九十七** **九十八** **九十九** **百**
 今言ふ所の珍事言ふ所の新柳のあひ
 自意をいへんくぬえのあひ月のきひ
 やうの乳と又夏の踏やおれひのま
 乳作中し種くして面白んたりく
 子おれの名妙後田の流しては海を遊て

晴光への秘事を妻の幸子の出世を恨む大
切のあゝ年おらぐうらうの大を男大孫あ
らぬ世はらりの安き祝所の侍り
任が家来との立お能の踊り名実方
と名堂進まぬのよくとみは成孫ら
故と中との立ふもくお建月家子
あゝうらうら余と元〔附〕小孫が
あそび味の後にも尾上のおせありむ
老女ののうらうらく尾上とのせり
おととのおれを毒屋と敷く毒の
さやを捨て尾上のおせありむ
娘の不衣を捨て後直のへり
敷せのへりお井三夜〔附〕おせんを
何らくお知がたの愛を台の務屋と敷
お徳けんがうと試しんとお奉せし

茶を迫て中巻のさびげ美伎のさや
ぶら大切のあそび京の魚を七十余
うらうらくおとととの侍り
今をわがと安進が来と足中と敷く
おん二見月金と里塚の立大孫あ
おれおびしし中村おれと足中
合の口上とあそび

上上吉  尾上松助 中村左

〔附〕おれおれと今余 〔中〕三節と入待

中しおあのおおとりのでふりま
おと十席の外しおと後と入能の
にへおとありで今中 〔ヒキ〕二夜
ひかの踊りおとと對面おとと
おとと中ま二見月おととや
返のせりおとと八右とと

あちち道の家路を舟弄るゆゑに釣口
 足付して二夜も尾廻り出づるを足返世川
 が秋中より暮りおぼのあはれの毒の毒ら
 りひんをく **五** 二夜十三夜極清にて
 かさのまらき **六** 二丁のまらきと
 およてなまを敷きのひもをく浮世川
 とお籠と二人の夜を言のこてぬく
 又後おぬのまらきおぼをうつゆあへ
 たごのひんをく **七** 二丁のまらきと
 およてなま **八** 二丁のまらきと
 りひんをく **九** 二丁のまらきと
 およてなま **十** 二丁のまらきと
 りひんをく **十一** 二丁のまらきと
 およてなま **十二** 二丁のまらきと
 りひんをく **十三** 二丁のまらきと
 およてなま **十四** 二丁のまらきと
 りひんをく **十五** 二丁のまらきと
 およてなま **十六** 二丁のまらきと
 りひんをく **十七** 二丁のまらきと
 およてなま **十八** 二丁のまらきと
 りひんをく **十九** 二丁のまらきと
 およてなま **二十** 二丁のまらきと
 りひんをく **二十一** 二丁のまらきと
 およてなま **二十二** 二丁のまらきと
 りひんをく **二十三** 二丁のまらきと
 およてなま **二十四** 二丁のまらきと
 りひんをく **二十五** 二丁のまらきと
 およてなま **二十六** 二丁のまらきと
 りひんをく **二十七** 二丁のまらきと
 およてなま **二十八** 二丁のまらきと
 りひんをく **二十九** 二丁のまらきと
 およてなま **三十** 二丁のまらきと
 りひんをく **三十一** 二丁のまらきと
 およてなま

款 **三十一** 二夜三夜極清にて
 かさのまらき **三十二** 二丁のまらきと
 およてなま **三十三** 二丁のまらきと
 りひんをく **三十四** 二丁のまらきと
 およてなま **三十五** 二丁のまらきと
 りひんをく **三十六** 二丁のまらきと
 およてなま **三十七** 二丁のまらきと
 りひんをく **三十八** 二丁のまらきと
 およてなま **三十九** 二丁のまらきと
 りひんをく **四十** 二丁のまらきと
 およてなま **四十一** 二丁のまらきと
 りひんをく **四十二** 二丁のまらきと
 およてなま **四十三** 二丁のまらきと
 りひんをく **四十四** 二丁のまらきと
 およてなま **四十五** 二丁のまらきと
 りひんをく **四十六** 二丁のまらきと
 およてなま **四十七** 二丁のまらきと
 りひんをく **四十八** 二丁のまらきと
 およてなま **四十九** 二丁のまらきと
 りひんをく **五十** 二丁のまらきと
 およてなま **五十一** 二丁のまらきと
 りひんをく **五十二** 二丁のまらきと
 およてなま **五十三** 二丁のまらきと
 りひんをく **五十四** 二丁のまらきと
 およてなま **五十五** 二丁のまらきと
 りひんをく **五十六** 二丁のまらきと
 およてなま **五十七** 二丁のまらきと
 りひんをく **五十八** 二丁のまらきと
 およてなま **五十九** 二丁のまらきと
 りひんをく **六十** 二丁のまらきと
 およてなま **六十一** 二丁のまらきと
 りひんをく **六十二** 二丁のまらきと
 およてなま **六十三** 二丁のまらきと
 りひんをく **六十四** 二丁のまらきと
 およてなま **六十五** 二丁のまらきと
 りひんをく **六十六** 二丁のまらきと
 およてなま **六十七** 二丁のまらきと
 りひんをく **六十八** 二丁のまらきと
 およてなま **六十九** 二丁のまらきと
 りひんをく **七十** 二丁のまらきと
 およてなま **七十一** 二丁のまらきと
 りひんをく **七十二** 二丁のまらきと
 およてなま **七十三** 二丁のまらきと
 りひんをく **七十四** 二丁のまらきと
 およてなま **七十五** 二丁のまらきと
 りひんをく **七十六** 二丁のまらきと
 およてなま **七十七** 二丁のまらきと
 りひんをく **七十八** 二丁のまらきと
 およてなま **七十九** 二丁のまらきと
 りひんをく **八十** 二丁のまらきと
 およてなま **八十一** 二丁のまらきと
 りひんをく **八十二** 二丁のまらきと
 およてなま **八十三** 二丁のまらきと
 りひんをく **八十四** 二丁のまらきと
 およてなま **八十五** 二丁のまらきと
 りひんをく **八十六** 二丁のまらきと
 およてなま **八十七** 二丁のまらきと
 りひんをく **八十八** 二丁のまらきと
 およてなま **八十九** 二丁のまらきと
 りひんをく **九十** 二丁のまらきと
 およてなま **九十一** 二丁のまらきと
 りひんをく **九十二** 二丁のまらきと
 およてなま **九十三** 二丁のまらきと
 りひんをく **九十四** 二丁のまらきと
 およてなま **九十五** 二丁のまらきと
 りひんをく **九十六** 二丁のまらきと
 およてなま **九十七** 二丁のまらきと
 りひんをく **九十八** 二丁のまらきと
 およてなま **九十九** 二丁のまらきと
 りひんをく **百** 二丁のまらきと
 およてなま

あうとお學ぶ忠義を居らせ世を教
して六の君を助るわがくまのまをせ
この世に降りて小碓海士の妻をんを
娘の所作りを承あひて二重をんを
上とかくとて（隠）経路へいよりのく見
及ふに及ぶ夜又大を表く（井）だん
まりの幕の跡を文にと種敷とやこの
をて面白くは及ぶをんを（井）の毫
五とたをて退のゆあひも（井）浅く娘
とのぬれや六建月お神志をんをくかつ
うよくまへのぬれをいなり女中方の
志をお面白くまへのづうとて（井）て乳
袋の仕目おわのすぬを承りて見おの大
線だん船を承りてまへへ支那の世を
おれづげくは使の元を承りてお悦び
やうとてアアとてああさうが承の書り
無衣より遠おごりおれを承りて
きて忠義をて悦びまへの歌とさうと
ののくおかへて承る退見おかん
娘とておれおれとて承とさうのおれ
もゆとておれと承りて承りて承り
八歳をて大歌をて承り

上上吉 （吉） 圖二十 節 名持

（尾）尾張をて介（木）木 （木）木 秋山夫のを
この本建者出世を承りてとて傍雲切丸
と承りて承りて承りて承りて承りて
金子と承りて承りて承りて承りて承りて
ろん入と見まよりのとて傍と（教）をて
るの大を承りて三夜河原の承りて承りて
びの娘を承りて承りて承りて承りて承りて

ひそく先人誦みおたやうにくぬくこゝろ
見ゆて花ゆく物ひかゝぬキヤリおんぞ
面白く介使とある二を月出村物氣
玉屋との多入男達と見入障よりおん
との及好而作もつり火切小女良き友
と並んでの口説はなと悪悪の秘ごと
た免して見んと紙あ屋へ切こも小女を
にの書進とて小女うら女をかんで
自害なくで死はと老人候り記光
ひでまゝ表衣の勅来と史むおん起して
表永と若く先安田が祈を定て之を
ころんと隣子の門へ捲入るとよとこへ
引かしく見れば母のさめと跡子の若
しと扱くまの天をつ忽むくひ十はさ
ちとあんと使今下いことあふおーも

毎
二

あひの外英々友者あつたにのゆと出て
富のお波京の地をゆるる進とてはし
二をぬるゝ集てははと火切の七変化お山
のまのむと大徳をん振のさの足府の子お
ありの田をきたはるる目の由よきありま
るひくゝと紙後ぶくの布はし初めく
百の森々の森有ぶりの入取の子け赤らぬ
まながら突きて海士と成り見ゆるあさ
海士まゝのしく取はしと海士く
くで死てもおん進のいやとや新扱てか
てのあひくちかぬ忠臣達の中よの女二夜
く平三役平太の太徳りごふりくこ
のの進退てはと升たぬ林登とお成
孫をく老田あつたよあれたの由勤の由子
がしく^{トキ}あ村登しく権沙五と権

後集
五
廿三

二役大巻をう二役不ばの四でひ作
 采の木にて名流を出しそのまゝむひて
 とせ布(号)くも浦と史ぬやく米がん
 くまがまと受てばる後うま谷を下りて
 源とと神がふのお流は重ののしをまん
 と源とと神ののしをまんをうま谷とまての
 まあひひてその神がとてんおもどうと
 おひやうと源ととをうま谷(遠)とてやを
 ちうふふのあめく井戸を出て衣被と
 改免丹波をうと教くおるの後後の
 おがうりあひてりてんはこ五建月二の
 上役とてばくくまひく経(い)をひては
 足しはり面白ひ五建月の初後小いお
 洞と流くもた回をスケてその上の
 流にいくまおまおのむとてお考を
 見ておんのでお流を有と巨抱て史状
 せよとそれくの史を流くはつうお采
 羽門七糸娘と足抜き夜光の玉を懸
 うふのあめくあひの祝まかたう

上上吉 〇 沢村田く助 あり

曙山夫の流をぬ地名妙ねをそ尾
 ろくお助上かこへあられは「れバ」の
 弾ハ糸文法の巻へゆすりまーと

上上吉 〇 市川糸巻 中村を

改丸 糸巻大で介井 天守 披戸をひ今
 実忍の大建者何後をも大史又を巻は
 赤法十門テふままん不対面一附家を
 かなごのふここまうと二を自公あつと
 史を糸巻をさかしてらのそくけあふん
 史とく二幕目の立面白ひく

遠の宮後之孫世後平切まくの出鱈
 大良と刀(男)の位とありてまくと大良
 親島の碓指とたる杖中へ携指とてお
 梶と十とと三人松入りのにくとやとの
 して大深だんだぬ娘屋の門にてと娘との
 せりふ凡著對變之濱田の局政景と派之
 おとあんとひ弁吉ととと刀てまくとこへ
 子松と政景男と女と岩山の子とと見込
 魚を駈れて八波と教へ年ま光の刀を
 刃と政景小油のさせ切らゆひまくと
 机をぬくと羽とのたまたかこへゆ政景と
 の立六道昔のそんぐくと刀(中)と是飛好
 荒獅子男と命せり上へ扇を刃てふんの
 とふ太さなくと市川流のお澄十作源兵
 二不破侍をたのふまはせんとまんか二母く

奴のま平二元月仁田忠堂又源をん文
 小呂中の中休しく常おたたせ奴夜街
 けりきと娘と娘のまおと前向くうたお
 こすと教へ二元月梶川長三景六とととの
 たて鏡のやがと素おは女が心若りとあひ
 いりの教女男の上は海ととお澄跡と素と
 婿とと娘との内世男のそあせ娘とまで
 を代の功有の八良素はと娘はと二員
 八百屋おぬちととと素がとる奴中ととく
 するあせせは法りお見解おちりとせす
 柳のつたを梳とてく八百屋のさくの
 親玉なると白と味とと治堂と娘はとん
 なく乳の毒とあひ平老人何娘もととく
 て死中が娘ととととと娘が中ととと井
 とふを強あして中実あは娘とととと

ても及外があらとぬの勢ひがぬけキ
 [廿七] 大内鑑之助半加茂の後室と
 ふなりそまへの外達とあつと高のん
 非と解んであつたのたて大徳のと助
 平とあつた平せ刀で不しん豆のひげ
 どのひげの男達大徳とのたて大徳
 来く若島あつた松徳のんあつた成徳
 成徳とたたりつるまゆすまひとく
 成徳とあつたあつと伊のせ何びこい茶
 せとあつたあつと水并投付あつたあつ
 なりて成徳とあつたあつたあつたあつ
 のりのあつたあつたあつたあつたあつ
 六徳のあつたあつたあつたあつたあつ
 後しこのあつたあつたあつたあつたあつ
 中しあつたあつたあつたあつたあつたあつ

うあつたあつたあつたあつたあつたあつ
 美徳のあつたあつたあつたあつたあつたあつ
 中しあつたあつたあつたあつたあつたあつ
 く二つあつたあつたあつたあつたあつたあつ
 一とあつたあつたあつたあつたあつたあつ
 大とあつたあつたあつたあつたあつたあつ

上上書回 市川雲之助

[廿八] 三河やまがキ [廿九] かたは社門の石
 ア今あつたあつたあつたあつたあつたあつ
 知んあつたあつたあつたあつたあつたあつ
 のあつたあつたあつたあつたあつたあつ
 ろとあつたあつたあつたあつたあつたあつ
 があつたあつたあつたあつたあつたあつたあつ
 けんあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつ
 のあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつ

第...
に...
小女...
スノ...
コ...
[イキ]...
武...
の...
門...
あ...
い...
て...
生...

キア...
六...
の...
来...
ど...
く...
そ...
ら...
あ...
上...
ろ...
あ...
サ...
お...
ハ...

工部 十一

歩を親の歌と称し六杖丈の公つゝ大
切の津より見やうとく女奴さび死夜の
大建者何とせしめても大と来く

上上吉 中村里好 赤田左

中村氏で命未 天七 浪村屋の路三
とつてハ知報生の建者何と来者なすれ
てかどういふ勅取をくしやうと見すは
嵩高とせし月夜に仕うらとを忍びすす

ヒキかもの傑ののり振くすのを振振く
ふりくつ坊を時久しく吟味の仕月
炎清振のふまをさやの起きにしての
さび死よとくは信田奴とてあまを女
抱の局の親まのくともあて六の君を奈
とくさうたんの仕うち婦の抱えさかど
せんとの心ほくひ要らうがねがとくあり

建の仕月湯さうけり功者のあひ付たを
あうさ心のりを時として建の仕うち六の君を
あ返せぬぬく大建者大建目のくすのこ
津りのの雨作のたやう 伝回をとりぬく
面白く春のさそやちくといひ中をう

上上吉 沢村四郎天席 赤田左

沢村川流を命未 天七 伝連波の異人
と成く巻おせ仁本あててお終二役大所
政忠を忍びくをれんとあくぬ工を痛む在
まうとくさうとく浪のまゆは正方回三つ
せの上ぬく刀あむとくといひさうとく三を
若子の我と浪とくさうとくさうとく作とく
あうとくあり伝をぬりてもいひとくさう
やうとく若子 丑方とくさうとく伝の
あうとくはれともあうとくさうとく男とく

去歳と成程八重く叔母の廣言を合
の太宰府の女太史と相後して後名の家世たる
所とありかき二夜助八お松を召くへく
供の者さ勤させ海りの進と宗と進と相
及してお松の海子のまをあらと川川たて
小黒にお官程八が海路を足して小黒が海小
親兄の歌とおくは二夜美の任門初めく
當座をせらる村は由勤伊よの有の二夜
後路も二夜及る志がくくの赤うお
がひさきりほど大をぬだの長力の海
くかんま

上上吉 ⑤ 浅尾勇次郎 赤田左

既記井筒巻で分半 大イ お子の功者鬼夫
先生が有然宗の海に五連目まぬけの大浮
ん二元目玉匠精と出村とのまひち訂
と成く男達の海が志のうりと足(九十九)

のりん(大イ)と親形志うぶうれ免い
くの景ト大イニスコ井と夜と志とわうへりれ
九十席のせふぬりせ帳なく進と成うと
と梅うけと花とえ孫とての進尼お大徳お
けとてこのわん(と) 尺切者 依う記宗長く
なりお下とびの仕目二夜らのさく成らへ
供を似せ着と足ぬき十ひらぐ子女と興(と)
親言とひりて(大イ)と坊まかり又このこと
成て光秀が海作やりの(巻)と久長(と)お
光秀の對面しく今下家との海進由功者
女中 二んめ半東右市のとまわりおかへく
もんが(と)志と親と今子の男進と光内はく
内へ取りくおらんとのは右ぬくうくでん中
三に ちちんと心をめ来しく内さうけか

ありうらうら大津をんで大津守に二日月
 おあつて向侍て出村をわかれぬすら
 せんぼとあり玉座をまゝとく勢太夫が
 秘蔵のイニスノ井をえんといろく玉子の
 仕ら **廿** 海老りのたけなややくえん
 うら我智十はと子真ながら陳野が
 ちとえとぬる八誠の十はと尺へ衣袋も
 ちとえとぬる大智の故と進りし本戸
 はでのたて進りゆく来と故とが刀のまの
 は尺突へ尺をく **三** 本戸を押めちちへ
 と入と大の字なりふ新なく丸掛てあそ
 のけと依とまのけぞぬく侍似合ぬ刀の投
 突とすもも流ぶりのまをまの空刀て
 ちとえとぬるまぶ仕と不見控へ尺へ
 ま **女中** 初まぐくの女抱てふ尺を成儀と

あつていよく陳野が勢を切ちしと門へ
 沖り久者のあそ切抜れぬくといくあり
 ちと **女** 二尺月古布のお端と成八百
 尺をまぬるおちとちの尺やに七まふ
 尺の付八百尺の口とて真女を屋下りぬ
 ちと **女** 一尺とく大をぬく衣はとまふまふ
 尺のまふ小平太夫のおちとちのお徳ぬく
 尺のおちまふと三尺小おちとちとちのち
 著者まふちとちと二尺おちとちのちとち
 大のち **女** 九月おちとちのちとちとち
 男一と小世末おちのちとちのちとちとち
 あつて積八と直垂とちとちのちとちとち
 ちと **女** ちとちとちとちとちとちとち
 ちと **女** ちとちとちとちとちとちとち
 ちと **女** ちとちとちとちとちとちとち

破立婦ありると嫁をさう二返り侍りて
 後でもうと新水丈二世代若宗と立田と春と
 後をあらわし 改 その切取をさるる松を
 改めて由馬地(下)りのいふ女をさして何とや
 のこ田丈を介し ト ト 女殿のすまひ
 時節は戸下その情女のいふ 改 改 改 改
 ぶひよく勤く取下りにく 改 改 改 改
 の幕せりよと肩衣をたてふ 改 改 改 改
 及びさすまぐおられの并と天と足(外)さ
 文はと申のたて候で足お統に候びみえ
 づりのまゝ小尾上のお統のえゝの取巻とて
 若くはおとのせりおとあそむく足おへ
 のまゝや 改 改 改 改 改 改 改 改
 はかり候はしくみとあそむく 改 改 改 改 改 改 改 改
 の御おん 改 改 改 改 改 改 改 改

塚にて重き常とるま 改 改 改 改 改 改 改 改

見え大源元は内坂系系 改 改 改 改 改 改 改 改

引合の以上その時見お 改 改 改 改 改 改 改 改

上上五 改 改 改 改 改 改 改 改

名巻林の 改 改 改 改 改 改 改 改

月 改 改 改 改 改 改 改 改

上上中 改 改 改 改 改 改 改 改

改 改 改 改 改 改 改 改 改

改 改 改 改 改 改 改 改 改

改 改 改 改 改 改 改 改 改

改 改 改 改 改 改 改 改 改

改 改 改 改 改 改 改 改 改

改 改 改 改 改 改 改 改 改


と糸の糸作中流りの踊ニやかづづ
繩のこえ縁よく二足月おつて七糸娘見せ
才人かゝりよく舞があらしとして面白く足
あゝらとび井

上上十  尾上紋三節 中村彦


院五 大和公の流の御りといふ遠敷村に
後々此の御流に二足月井田の君太あつて
こゝに長長松井二夜跡の者中取取妻
なる大徳元流田産と男王と係り忠告
とせ中村彦といふり志賀崎生駒女大
で死く

上上  山岩井桑三節 中村彦

院五 大和公の流の御りといふ遠敷村に
王丸跡よく二足月おつて面白く足
あゝらとび井

上上  市川信義 中村彦
院五 大和公の流の御りといふ遠敷村に
後々此の御流に二足月井田の君太あつて
こゝに長長松井二夜跡の者中取取妻
なる大徳元流田産と男王と係り忠告
とせ中村彦といふり志賀崎生駒女大
で死く

院五 大和公の流の御りといふ遠敷村に
後々此の御流に二足月井田の君太あつて
こゝに長長松井二夜跡の者中取取妻
なる大徳元流田産と男王と係り忠告
とせ中村彦といふり志賀崎生駒女大
で死く

上上  山岩井桑三節 中村彦

院五 大和公の流の御りといふ遠敷村に
後々此の御流に二足月井田の君太あつて
こゝに長長松井二夜跡の者中取取妻
なる大徳元流田産と男王と係り忠告
とせ中村彦といふり志賀崎生駒女大
で死く

し流す所の根元之本等の口口上も大
方りの中一着の長恨執事と云ん
のて二夜後徳政の若娘がはぐりお付く
り國をぬと先者さう味方とせよの事
とて運くより先かきせは後も後言とせ運
悲恨血書出せぬの事と云はせり
夏もしく平武指門が美由の事
此の首打筋をたにせよと云ひく
久年大和の大徳元元同事と云
昔上家の事あるを今人のおは
ぬと云はせり
三人と引合の口口上も大

上上士 市川宗三郎 森田

友と二夜あびらのお二ん女
た公事柄は侍の男と女と二夜トめん
強く二夜あびら侍の二夜あびら
二夜あびら侍の若くは二夜あびら
尺曲と云ひく

上上士 市川三郎 森田

運後の外記たつ二夜あびら侍の二夜あびら
侍の事と云はせり
仲たれと云はせり
上人徳もあり男王の口口上も大
の事村方へお勤多田の儀仲二夜後徳次
二夜月おびく

上上士 市川女若 森田

正

次 市川氏の歌役の老幼若村、澤平、
 三、元月、局連の写録、在八十、特原、
 伴作、高良、せ、森田、元、勅、む、で、主
 と、成、後、下、と、別、後、す、と、く、二、元、月、三、分
 大、後、の、時、の、其、の、事、し、し、し、し、

上上士 相鴻依太馬 未田を

次 大、後、の、時、の、其、の、事、し、し、し、し、
 平、平、二、元、月、の、の、久、五、大、力、仁、平
 勇、我、者、と、く、の、海、友、我、の、事、作、二、役
 好、振、川、和、平、太、二、役、及、び、女、の、と、は、せ、て、も
 石、舟、の、歌、玉、高、良、と、せ、中、る、よ、び、女、と、
 下、れ、し、し、し、し、

上上士 市川おのゑ 中村を

次 歌、の、次、を、我、と、妻、女、中、の、所、と、二、元、
 月、忠、之、女、が、了、達、の、写、録、仲、の、井、十、指
 係、氏、お、と、や、二、役、お、枝、菊、水、巻、仲、沼、二、元、
 り、お、ち、の、柿、大、口、燈、籠、波、振、つ、つ、れ、も
 強、く、高、良、と、せ、り、さ、う、と、成、あ、り、

上上士 山下万作 市村を

次 二、元、月、の、其、の、事、し、し、し、し、
 笛、吹、呼、之、山、城、と、の、た、て、其、の、事、し、し、し、し、

上上士 尚 強 義 中村を

次 二、元、月、の、其、の、事、し、し、し、し、
 二、元、月、加、し、と、忠、臣、義、山、名、の、た、り、高、良、
 と、せ、中、村、を、勅、之、建、目、の、事、二、元、月、
 二、元、月、人、事、め、ら、し、し、し、し、

上上士 吾妻坂 義 市村を

次 二、元、月、の、其、の、事、し、し、し、し、
 の、お、ふ、り、後、り、元、局、後、二、元、月、の、事、の、お、つ、

忠長がふお石の腹目の大徳と申す由とせ小
い口の冠者よりのふあ流がうらむいふく
二夜りな後りのふおと申す作中孫の外
出出情目おとく

上上十 山下八尾 中村 坂東三津三 中村

況丸 けいふ夫の上がこの奴も苗字も名も
すくい後の所改名なくお江戸の所住旅か
ら入るが久原更二を月鳴戸せ道の家後
おと十惟源氏おのころ家お巻玉川二をんめ
お今白石おん迄大日理東のひき出とせ
とくーも二夜りな後りな

上上十 市山七巻 中村

況丸 枚のや事ふ夫の曾孫小友を二を月若
況と道の家後鬼つとわ特後平二をんめ竹
葉おたふ況二を月十巻大日理安田が女
がう苗字とせ民ア二夜りな後りな

上上十 山嵐 新 平 中村

況丸 成田を夫の連係仁田屋二夜荒井和
女後ふ袖を化着旅客の八竹也とて六中
村産ぬぬり平有と二夜りな女中ころは
てた

上上十 兎井七三郎 赤田

況丸 高田屋夫の曾孫小友を二を月おりの奴
信く況けん九二をんめを養太忠長とて石巻
出島とて申す田屋ぬ脚虎をを二をんめひ
八丈とて

上上十 中村 敬義 中村

況丸 中村氏の月廿八日の返にて月廿九日
より流勤者枚と畑友のたけんがりの二夜二
を月松屋新と人信とてせき忠長とて

之三人定かゝるなり署中平流登る例之
若くは其の端息とせ小大流等との下はしこ

上上平 中山つと 市村彦

既五中山氏ハ男村彦を全全とて見目之
精刻九十二太南り候より記主多二重なる
屋のぞく忠臣と侍内ひら子の持持と書
息とせ母波者二後矣中拥ありしはこ

上上 坂東者二 市村彦

既五築地先生の遠流の源入流と砂と
息二元め女男之夜更り作女嫁とく書
息とせ市村彦由勤の築地者ナキ二後書好
下候や〜

上上 沢村金平 市村彦

既五紀伊屋息ハ男村小信三元め由勤抄息
大門様かもの後息二中へ川魚方強よく
當息とせ市村彦由勤よりの本村又は二後
出ひろ大と〜

上上 小依川七郎 赤田彦

既五縁や大か書下り出勤つとこれナ
上上 松本小次郎 市村彦
既五厚漬と鬼つ〜候と砂十二三畝有中
赤松彦中男王と〜い沙書田息とせ二後
大と〜

上上 下川 行松 松助 赤田彦

既五十月十六日自公返少くす〜息とせ程人
二元目由出勤奴房平二後武義抄とて死
中〜

上上 山下八百蔵 休

既五山下氏ハ三月程多中村彦由下り違の
写候とたつ〜十後保氏〜の〜ひめ桑あ〜

是列の良女二死月お竹大門隈小ふ下流
よく常良とせ成体と妙き

上上 小川を太郎 赤田左

記述 逢坂のうらむ侍三夜程多々男王
井筒や常良とせ成体と妙き五建月の建の
成功有く

上上 沢村渡天席 赤田左

記述 常良とせ成体と妙きのふと二夜一かく
火事あり

上上 岩井梅義 赤田左

記述 逢坂の星の井深と袖を演二死月お
その及程のまきぬ男王とみさかのあてれ
すし常良とせ成体と妙き小ふ常良のしほ

上上 市川滋三席 赤田左

記述 常良とせ成体と妙きのふと二夜一かく
記述 常良とせ成体と妙きのふと二夜一かく
すし

上上 坂东大八席 中村左

記述 常良とせ成体と妙きのふと二夜一かく
常良とせ成体と妙きのふと二夜一かく
とせ成体と妙きのふと二夜一かく

上上 中村春之次 中村左

記述 三ひかりにく常良とせ成体と妙きのふと二夜一かく
上上 坂东大右 中村左

記述 常良とせ成体と妙きのふと二夜一かく
豆七十恒源氏法中常良とせ成体と妙きのふと二夜一かく
門隈の常良とせ成体と妙きのふと二夜一かく
戸隈の常良とせ成体と妙きのふと二夜一かく

上上 市川滋三席 中村左

市川 五十一

辰之邊の志後心平大川とて播のり
考案とせし志平二夜相成とて凡く

上上 坂東の播十席 市村

辰之 池原種元とて凡く播のり
正小仏小三舟者の子とて凡く考案とせし
市村九夜相成加後忠正二夜とて凡く
下凡く

上上 中村及席三 赤田

辰之 考案とせし化お成とて凡く二夜辰八
考のり

上上 漱川後次席 中村

辰之 考案とせし子業ありとて凡く大川とて
市村考案とせし松山とて凡く

上上 松本八十八 市村

辰之 考案とせし大川とて凡く考案とせし
とせしとせしとて

上上 芳沢稲三席 市村

辰之 考案とせし及忠正とて凡く考案とせし
中一考案とせし凡く考案とせし

上上 三井大老席

辰之 三井大老の凡く考案とせし
久延一凡く考案とせし凡く考案とせし
考案とせし凡く考案とせし
上上 考案とせし

上上 市川糸巻 中村

上上 市川の助

上上 市川新巻 市

上上 市川榮巻 市

辰之 考案とせし凡く考案とせし
凡く考案とせし凡く考案とせし

席八束蓋夫八入及らるんがまとも
らりやう

そ外の流中への月録宛

上 下り 市川熊吉席

此五中村お江のきで介中おゆきとて
成たのこや上中

▲五巻袖

本上吉 〇 行忌佐友の 表田

此五中村お江のきで介中おゆきとて
成たのこや上中

功上上吉 〇 助も屋吉助 中村

此五中村お江のきで介中おゆきとて
成たのこや上中

連有老切の名人お徳たつ二や時政
三夜系流きつ二を月のお深きとて
こ二連家流の長ア主人お兼三美かんて

吉尾おゆきのきで介中おゆきとて
成たのこや上中

此五中村お江のきで介中おゆきとて
成たのこや上中

此五中村お江のきで介中おゆきとて
成たのこや上中

此五中村お江のきで介中おゆきとて
成たのこや上中

此五中村お江のきで介中おゆきとて
成たのこや上中

此五中村お江のきで介中おゆきとて
成たのこや上中

此五中村お江のきで介中おゆきとて
成たのこや上中

此五中村お江のきで介中おゆきとて
成たのこや上中

此五中村お江のきで介中おゆきとて
成たのこや上中

此五中村お江のきで介中おゆきとて
成たのこや上中

此五中村お江のきで介中おゆきとて
成たのこや上中

此五中村お江のきで介中おゆきとて
成たのこや上中

此五中村お江のきで介中おゆきとて
成たのこや上中

此五中村お江のきで介中おゆきとて
成たのこや上中

五十年小も日近のりくはた連中を
とせりりくのはたひまのたを
あや暑中湯治の及中へのたを
このもや茶茶のたかおひ大生板
の暑気休着板のたはごうきんま
あや二の暑の大生を強て暑中へ
休り、井き人の入り近き長板
はくはあやの評元他とて月とせ
あはでしや

千未電万歳樂叶、
作者 自笑

文化十一年
改正と在也

父字屋八右門 板元
河内屋太助

板元東西く三枚並若敷板若藤並定
評判記之義救年米流布のり中ゆは
ゆは近比具買之沙流米津並生
之評判何は秋あおは月他去
年か格別貴材お改^{イキ}二都へ勿論
件勢尾張場中その程とを不瀬
させ他老緒有好人方之清月鏡
至極微細な評判付仕^{板元}何とて
此最之通ふ相替戻しは清米山境下
は板とみり満^{板元}評判^{板元}下致白

- 江戸 鵜屋 赤右衛門板
- 名吉屋 寺町 善吉 常板
- 系板 松屋 安吉 常板
- 大板 八文字屋 八右衛門板
- 心板 河内屋 太助板

流光每画
役者物いまい
三ヶは役者之存せ
画本

同畫
同百人一首化粧鏡
自笑著

此幸之弟子違方乃持持入と起以百人一首の
顔と芝居又幸は様又仕組役者幸あり相云
すごう似似る存まうけし相言ふ歌仙源氏上
志つけ方未やても幸女く芝居又見立ふ極
おのりろき書あり

同画
同後篇艸之種
昔は編同様
似るの多あり

一陽 齊魯豊國畫
戲場劇世家同畫
或亭三馬 戯編
全部 五冊

此書は芝居の事と和漢劇世家同畫よりな
らひて面白く似る事也 幸著
道々立此は役者の家名能事年中次り
のせり付其外芝居よりつくる事
幸著ハおあつたり 役者似る乃
又は幸と似る芝居は幸ハ誠と
大立は幸著

芝居案内両面鏡
福案内此書也
幸著抄本

松好每画
芝居案内
山井風呂此根幸
全部 三冊

此書は幸無團士時雨傘乃根幸せり幸著
より大如き似る事也 幸著
先と見れを芝居と見ても同様の事也
不抄善あり 幸著
幸著より下此同様の事也

同画
言此葉艸
平井権公根幸也
全部 五冊

同画
忠臣蓮理鈴植
植木や此根幸
全部 五冊

全画
川崎音頭
伴舞は十八切根幸
全部 五冊

全画
棧橋物語
日本左衛門根幸
六冊

全画
壁生草
五人切の根幸
四冊

全画
淡乃志砂
石川五右衛門根幸
五冊

菊洗銭
嵐春之根幸
二冊

春好亦書
各好眼乃切子
一名眼之數辭
古手屋八條兵衛
四冊

猿臈門出乃韻
かきりて入
三冊

つづみ此蝶
和因大八矢救の根平
六冊

竹相根流初花
いとまの竹射の根平
八冊

松好亦似教
我場はさし
藤原の権六日初云
五冊

三都仙慶直跡手鑑
役者用文章直指箱
武冊

増補我場つ鏡
四冊

此書ハ三教芝居の初りより二年のつづみ此のまゝ
しつゝのまゝ芝居のつづみ芝居近役表のつづみ芝居
芝居のつづみ芝居のつづみ芝居のつづみ芝居のつづみ芝居
年中のつづみ芝居のつづみ芝居のつづみ芝居のつづみ芝居

役者一口高
三冊

大芝居中芝居のつづみ芝居のつづみ芝居のつづみ芝居のつづみ芝居
師のつづみ芝居のつづみ芝居のつづみ芝居のつづみ芝居

